

---

# 闇夜の友愛

白黒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

闇夜の友愛

### 【Zコード】

Z2743X

### 【作者名】

白黒

### 【あらすじ】

うちはサスケに憑依した主人公。主人公はうずまきナルトと日向ヒナタの幸せの為、色々な事をする。サスケとナルトとヒナタはスレます。三人は里の為でなく自分達の為に動きます。シリアスでダークに書いていくつもりです。

スレた者の憑依（前書き）

物語の始まり・・・

## スレた者の憑依

俺の名は・・・いや、前世の名はいらないな。

今の俺の名は“うちはサスケ”。

木の葉の名門“うちは家のの人間だ。

ここまで聞けば分かる者はいるだろ？

ここはNARUTOの世界だ。

まず、何故俺がサスケなのか答えよう。

多分分かつてているだろ？が俺はサスケに憑依している。

俺の前世はNARUTOが好きな擦れた人間だ。

子供の頃、親や同級生から苛めにあいそれが原因で誰からも信頼せず体を鍛え暴走族になつた。

しかし、子供の頃からアニメや漫画が好き・・特にNARUTOが好きだ。

その為俺が所属する暴走族は俺と同じような擦れた人間ばかりの暴走族だ。

俺はいつものようにバイクに乗り駆けていた。

しかし、俺は交通事故にあい重症を負つた。

病院に輸送されたが程なく死んだ。

俺は何故か黒い空間にいた。

そこで神と名乗る奴と出会つた。

「私は神だ。本来君は死ぬ必要はなかつた。私のせいで死なしてしまつた。本当にすまん。」

どうやら俺は神の手違いで死んでしまったようだ。

「お詫びとして君に力を与えて新たな生を受けるがいい。何処の世界がいい?」

俺はそれを聞き、NARUTOの世界に行きたいと答えた。  
力は、うちはサスケになりたいという事とチャクラを増やして欲しい事さらに写輪眼の失明を無しにしてもらう事を頼んだ。  
神は了解してくれた。

そして、世界に飛ばされた。

世界に飛んだ俺はうちはサスケとして生を受けた。

うちはサスケとして生まれて早二年の時がたつた。  
俺はこの世界で生きる為、色々な訓練をした。  
まず覚える事はチャクラを使えるようにする事だ。  
死ぬ思いを沢山し、チャクラを使えるようになり写輪眼も獲得でき  
た。

これを知っているのは兄である“うちはイタチ”のみ。  
兄に知られた事により、俺は兄と訓練をする事になった。

さうに一年がたち、俺は森の中で訓練をしていた。

その時、何か声が聞こえた。

気になつた俺は聞こえた方に行つた。

そこで見たのは、三人のガキに苛められていた“うずまきナルト”と“日向ヒナタ”だつた。

俺は一人の前に現れ立つた。

「な、なんだよお前は！？」

「・・・うちはサスケだ。弱い者苛めして楽しいか？楽しいのであれば俺にも味わわせてくれ。貴様らでな！」

俺はナルトとヒナタが好きなキャラだ。

だからそんな二人を苛めたこいつらは許せん！

俺は三人のガキをボコボコにしてやる。ガキどもは泣きながら逃げていつた。

「よお、大丈夫か？」

「う、うん。大丈夫。」

「俺も大丈夫だ。」

俺はナルトとヒナタに挨拶をした。

「俺はうちはサスケ。二人の名前は？」

「うずまきナルト。」

「・・・日向ヒナタ。」

これが、俺とナルトとヒナタの出会いだ。  
そして、この出会いから俺の物語は始まる。

## スレた者の憑依（後書き）

NARUTOのシリーズでダークな物語の始まりです。  
次回は二年後の話です。

## 信頼する者達（前書き）

出会つた者達は物語を紡ぎ始める。  
しかし、これはまだ序章・・・

サスケはナルトとヒナタの二人と仲良くなつた。

あのあと、日向の護衛役の人間が現れヒナタを連れ帰つた。

その時のヒナタを見る表情は何とも嫌そうな顔をし、なんでこんな小娘をという感じだつた。

そして、ナルトを見る目は里の奴等と同じ嫌悪の目付きたつた。

サスケは、羨ましそうな顔だつた。

だが、サスケはそんな護衛役を見もしない。

次の日、サスケはナルトとヒナタをイタチの前に連れて來た。

「サスケ。この二人は？」

「兄さん。こいつらは昨日ある森で苛められていたのを助けたんだ。連れてきたのは何となくだ。」

ナルトとヒナタはイタチを見て怯えている。

「・・・二人共、名前は？」

「そりいえば、名前を言つてなかつた。二人共、俺はつちはサスケ。

」

「サスケ。名前くらい言わなきやだめだろ。俺はつちはイタチ。こ

のサスケの兄だ。」

サスケとイタチは名前を言ひづ。  
それを聞いたナルトとヒナタも名乗る。

「つずまきナルト。」

「日向ヒナタです。」

「日向？なるほど、その日は確かに。（それにこの少年があの九尾  
を宿した……）」

イタチは名前を聞き、すぐに理解した。

「それでサスケ。この二人を連れてきた理由はなんだい？」

「……兄さん。一人を鍛えてくれないかな。俺も手伝うから。」

「何？」

ナルトとヒナタを鍛えてくれ……それを聞き、イタチは驚く。  
何故なのかわからない。

「理由を聞いても。」

「昨日一人が苛められていてそれで、それと日向つてうちはと並ぶ  
名門だろ？なのにヒナタの護衛役の人かな。そいつがヒナタやナル  
トを見る目がムカついたから。」

「……なるほど。」

サスケの解答を聞き、イタチは納得した。  
しかし、問題があった。

「ナルト君を鍛えるのは問題ない。だが、ヒナタちゃんはさすがに問題がある。」

何故ヒナタに問題があるのかといふと彼女は名門の子だ。  
いくら鍛えるにしも名門の子を勝手に鍛えていいか難しい。  
ナルトも本当は問題はある。

ナルトは腹の中に九尾がいるのだ。

普通はかなり危険だ。

しかし、イタチはナルトをこの田で見て危険はないと判断した。

「あ、あの！」

「？」

「お、お願いします。わ、わたしを鍛えてください！」

「・・・いいのかい？」

「・・・お願いします。わたし、父上にみんなに見てもうつてくれない。みんなわたしの存在が邪魔見ないに邪険にする。わたしはそんなの耐えられない。見返したい。父上をみんなを見返したいんです！お願いします！わたしを鍛えてください！」

ヒナタの心の奥底にある本心を言葉にした。

それを聞き、サスケ達三人は驚いた。

ヒナタがまさかこんなにはつきりと言つなんて思わなかつたようだ。

「・・・わかつた。ヒナタちゃんがそれを望むなら鍛えてあげよう。

「

「はいー。」

こうして、ナルトとヒナタはサスケとイタチに鍛えられる事になった。

さらに一年の月日が流れた。

サスケとナルトとヒナタはかなり修業し鍛えられ暗部クラスの強さになった。

イタチは暗部となり木の葉の為に働く。

そんな中、ナルトとヒナタの性格が変わった。

ナルトはサスケのおかげで体内にある九尾と出会いつ。

さらに父の波風ミナトと母のうずまきクシナと出会つた。

ミナトとクシナ、さらにサスケのおかげでナルトは九尾を御せるようになつた。

しかし、それが災いしてナルトは里が何故自分を毛嫌いするのか知つた。

それを知つたナルトは里の人間達を嫌い、サスケとヒナタとイタチしか信頼できなくなつた。

ヒナタは本当に強くなつた。

だが、偶然ヒナタは父の日向ヒアシが自分を既に見限つている事を言つていたのを聞いてしまつた。

さらに、一年前に妹の日向ハナビが生まれ、ヒアシはヒナタを分家

の人間に嫁がせようと画策しようと考へてゐるのを知つた。

簡単に言つてしまえば売婦扱いである。

そのことに気付いたヒナタは日向に絶望し完全に毛嫌いした。ヒナタの性格は変わりおどおどした感じは消え冷静な感じに変わりナルトと同じようにナルト達三人しか心を開かないようになつた。しかし、良い事もある。

ナルトとヒナタが恋人同士になつた。

何故かはわからない。

恋や愛とはそんなものだ。

サスケとイタチは二人を祝福した。

六歳となつたサスケとナルトとヒナタはアカデミーに通う事になつた。

しかし、三人にしたらつまらないの一言である。

サスケ達は力を押さえてる為、かなり疲れるようだ。

アカデミーに入り数週間がたつたある日、イタチはうちは一族から疎外された。

ある理由でイタチはうちは一族からの命を受けなかつた。

しかし、そんな中サスケだけは両親に内緒でよく話してゐた。

二日後、サスケとナルトとヒナタはイタチにある事を頼もうとしていた。

「どうしたサスケ？俺に頼みたい事というのは。」

「兄貴、実は三人で決めたんだ。俺達を暗部に入れてくれないか？」

サスケがそう言つた瞬間、イタチの目は見開いた。

まさか、三人が暗部に入りたいなんて思わなかつたからだ。

「サスケ、ナルト、ヒナタ、お前達の気持ちはわかつた。しかし、サスケはともかくナルトとヒナタは里が日向が嫌いだろ。なのに二

人は里の為に動くのかい？」

イタチの言い分にも理がある。

ナルトは里嫌い、ヒナタは日向嫌いだ。

それなのに里の為、日向の為に動くなど考えられないのだ。

「もちろん俺は里の人間どもが嫌いだ。別に俺は里の為じゃない。俺自身のためにヒナタのためにサスケのために力を生きるすべが必要だ。だから暗部に入つてさらに力を付けたいんだ！」

「わたしも日向のためじゃない。わたし自身のためにナルト君のためにサスケ君のためにわたしはさらに力がほしい。だからお願ひします！なんとか暗部に入れてください！」

イタチはナルトとヒナタの入る理由を聞き、思案する。  
二人はサスケと同じくらい大切な弟と妹みたいなものだ。  
暗部に入れてもいいと感じてしまう。

しかし、暗部は危険な任務が多い。  
簡単に入れていいいものか。

「兄貴、二人の決意は高い。俺も暗部に入つて二人を助けたいし俺自身も、もつと強くなりたい。だから・・・頼む！」

サスケは頭を下げる。

サスケに習つてナルトとヒナタも頭を下げる。

「・・・ふう。わかった。俺が何とかして火影様に取り付くつてもらおう。」

三人の熱意に負け、イタチは三人を何とか暗部に入れるよう火影に

頼む事にした。

三人は喜びイタチに礼を言つた。

次の日、イタチは火影に三人を暗部に入れてもらうよう頼みこんだ。火影は最初は渋つたが三人の根気に負け暗部入りを許可した。

三人は晴れて暗部入りした。

ただし、これを知るのは極一部しか知らない。

そして、遂に始まる・・・うちは一族の滅亡が・・・・・イタチの手によつて。

## 信頼する者達（後書き）

三人はスレる。

里に、名家に、家族に、絶望してスレた。  
スレた三人は闇に溶ける。

次回はうちの滅亡・・・

**悲劇・・転機の始まり（前書き）**

悲劇が起らねばうとしている。  
しかし、三人にはどうでもいい事。  
だが、これが新たな道なのだ。

サスケ達三人が暗部に入り数日がたつた。

サスケ達三人は危険な任務をチームで組み、戦闘経験を積んでいく。初めて人を殺した時は多少の嘔吐感とそれ以上に自身の奥底にある高揚感に襲われた。

数回の任務をこなしている時、サスケに万華鏡写輪眼が開眼した。言い忘れていたが、サスケはすでに四歳の時に写輪眼を開眼していた。

サスケに万華鏡写輪眼が開眼した事を知ったイタチは驚愕した。もちろん、どうしてと聞いた。

「わからない。俺の写輪眼は異質なかもしれない。」

そう言い、イタチを納得させた。

それからさらに数日がたつたある日。

それは満月がよく見える日の夜だった。

その日、うちは一族がある人物により滅亡した。滅ぼした人物はイタチだ。

イタチがうちは一族を滅ぼしたのだ。

イタチは里から出ようとしていた。

「兄貴。」

「……サスケ。それにナルトとヒナタ。」

その時、暗部の任務を終え帰還する途中のサスケ達三人と出合つた。

「イタチ。その血は？」

「……その血、うちちは一族ですね。」

イタチは三人に気付かれ困り果てた。  
しかし、どうせばれるのだ。  
なら、ばらす事を決意した。

「そうだ。俺はうちちは一族を滅ぼした。里のために……俺は……」

「そうか。兄貴、それが兄貴の選んだ道なら俺は何も言わない。」

「……すまない。」

イタチは改めていい弟を持つたと自覚した。

「イタチさん。すみませんが貴方の目を見させてください。」

「何？」

「もしかしたら、イタチさんの目が失明する可能性があります。そういうならないようにわたしがあなたの目を治します。」

「……知っていたのか。」

イタチはヒナタが自身の目が失明を始めたのを知っていたのを驚い

た。

「知ったのはほんの偶然です。お願ひです。治療させてください。」

「しかし。」

「心配しなくていいぜイタチ。ヒナタは医療忍術も学んでんだぜ。しかも腕は一流だ。絶対に治してくれる。」

イタチはサスケを見る。  
サスケはうなずく。

「・・・わかった。頼むヒナタ。」

ヒナタはうなずき、すぐさまイタチの両手の治療を開始する。数分後、治療完了した。

「どうですか？」

「・・・良好だ。今まで見えずらかったがよく見える。感謝する。」

イタチは感謝の礼を言い、里から去った。

サスケ達三人はイタチを見送ったあと火影邸に任務報告を言いに行く。

部屋に入り、並んで立つ。

「火影様。任務報告しにきました。」

「つむ。『苦労じゃったな。・・・サスケよ。』

「はい。」

「実はのお・・・」

「兄貴がうちは一族を滅ぼした事ですか？」

「…なんで知つておるのだ…？」

「帰還する途中に兄貴に会い聞きました。」

「そうか。」

火影は目を閉じる。

火影はサスケがまさかイタチに賛同するのではないかとヒヤヒヤしている。

しかし、サスケからはそんな感じが全然ない。

「心配するな。俺は別に兄貴をあとを追う気はない。俺には俺の道がある。だから、安心しろ。」

「…うむ、分かつたのじゃ。ナルトとヒナタはどうじゃ？」

火影はナルトとヒナタにも聞く。

一応、イタチはナルトとヒナタの師なのだ。

「安心してくれじいちゃん。俺はヒナタがいればいいんだ。だから行く気はない。」

「わたしも同じです。ナルト君がここに残るのなら残ります。」

「・・・分かつたのじゃ。」

火影はホッとした表情になる。

「ふん、相変わらず甘いなヒルゼン。」

扉の方から声が聞こえた。

三人は振り返ると、一人の老人が立っていた。

「ダンゾウ・・・」

志村ダンゾウ・・・暗部を育てる組織『根』の創設者で凄腕の忍。かつては三代目と火影をかけて対立した事がある。しかも同期。

サスケは何故ダンゾウがここにいるのか分からなかつた。

「ダンゾウ、何しにきたのじゃ。」

「ふん。イタチがあのあとどうなつたか気になつてな。」

「・・・イタチならすでに里から去つたわ。この子達が目撃しどる。」

ダンゾウがサスケ達三人を見る。  
今見たという感じで。

「ほうつ、まさかイタチの弟に九尾の小僧、おまけに日向の落ち零れか。」

(ふむ、情報とはかなり違うようだな。見たところ九尾の小僧は九尾をコントロールしとするようだし、日向の落ち零れもかなりの手だれだな。)

ダンゾウは見下した目でみているが、内心では、三人の強さに気付く。

サスケ達三人もダンゾウの奥底にある目に気付いた。

「何故こやつらがここにいる。それにその格好・・暗部か。なるほど、最近小さいながら強い暗部が三人ほど現れたと聞いたが、まさかこいつらだとはな。」

サスケ達三人はダンゾウの言葉を無視する。

「ダンゾウ、貴様に三人を殺らせん！もし殺るといつなら！」

「安心しろヒルゼン。そこにいる三人を殺る気はない。わしはイタチの事を聞きにきただけだ。用事はそれだけだ。」

火影はダンゾウに殺氣をぶつけるが、ダンゾウは何事もなかつたのよしに自分がここにきた理由を言い部屋から出る。

「・・・ふう。すまんな、もういいぞ。任務報告はすんだ。今日はもう帰つてもいいぞ。ただし、サスケにはどこか住む場所を与えんとな。」

「わかりました。それはまた今度にお願いします。それでは。」

「うむ。」

サスケ達は部屋からである。

少し歩いたあと、サスケはヒナタを見る。

「ヒナタ。ダンゾウがどこに行つたか分かるか？」

「（うへつ）・・白眼・・・地図こころ。少し遠いけど。」

「どうあることだ？」

ナルトはサスケが何故ダンゾウを探してほしかつたのか気になつた。ナルトからしたら、あいつは嫌いな部類だ。自分を道具扱いする目だ。

何故そいつを？

「あいつは暗部を育てる根の創設者だ。あいつなら俺達をさらに強くしてくれるはずだ。だから、奴に頼もうと思つ。」

「でも、そんな事をすればわたし達あいつに利用されりやうかも。」

「もちろんさうだらうな。だが、俺達もあいつを利用してやるんだ。俺達が生きる為にも自由を得る為にもな。」

もちろんサスケはそれ以上の事も考えてこる。

自分達がダンゾウに取り入れる事ができれば今後の行動範囲が広くなる上戦闘経験も増えるはずだ。だからなんとしてもダンゾウに取り入る必要があるのだ。

「わかった。そこまでいつなら俺は付き合はず。」

「わたしも。」

「決まりだな。」

サスケ達はダンゾウがいる場所に行く。

トラップやダンゾウお抱えの暗部と戦つたりしたが、なんとかダンゾウのところに到着した。

「ふむ。誰が侵入してきたのかと思つていたら貴様らだつたとはな。で? 一体なんのようだ。わしを殺しにきたのか。」

ダンゾウは油断もなく構えながらサスケ達に話かける。

「安心しろ。アンタを殺る気はない。俺達がアンタに会つにきたのはただ一つ、俺達をアンタの部下にしてくれ。」

ダンゾウの目が微かに動く。

「じつにうつ事だ? 何を考えている。」

「正直に話すと俺達は里の事なんかどうでもいい。しかし、俺達が生き延びる為にもどうしてもいろんなところのパイプが必要なんだ。そこで、アンタのような裏に精通で権力も高い奴の下についたほうがいいといつ事だ。」

サスケは多少の嘘をつき取り入れるよう説得する。

ダンゾウはサスケ達を舐めまわすように見る。

「・・・ふむ、よからぬ。それまで言つながら今日からお前達はわしの部下だ。」

ダンゾウの言葉にサスケはニヤッと薄く笑う。

これでサスケ達はダンゾウといつパイプを持つ暗部になつた。



悲劇・・転機の始まり（後書き）

三人はさらに深き闇へと落ちる。  
それでも三人の思いは消えない。  
変わることもない。  
次回は一人の死・・・

## 表での死（前書き）

繋がりを絶つ簡単な方法・・・それは死。

## 表での死

うちは一族が滅亡してから数日がたつたある日、ヒナタのこの一言から始まった。

「わたし、日向から抜け出したい。」

ヒナタのこきなりの言葉にサスケとナルトは目をパチクリさせる。

「急だな。どうしたんだ？」

「だってこれから事を考えるとどうしても日向が邪魔なんだもん。どうにかして日向から抜け出さないと。」

ナルトが聞くとヒナタが日向ともう繋がりたく無いこと。サスケはどうしようか考える。

確かに今後を考えるとヒナタは日向の為と称された行為を受けなければならぬ。

それを考えると確かに繋がりは絶つたほうが多い。

「どうする？ サスケ。」

「・・・火影に言つても期待は薄い・・・つとなると奴だな。」

「奴・・・もしかしてダンゾウ?」

「正解。」

サスケはダンゾウに聞く事にすると言つ。  
ナルトとヒナタはさすがにどうかと思つた。

「確かにダンゾウに頼むのはシャクに障るが、今のところここに  
聞く以外に手は無い。」

そう言われてナルトとヒナタは仕方ないといった表情になる。  
言われてみれば確かにダンゾウ以外に適任者がいない。

「そういう事だ。さつさと行くぞ。いつこつのは早く済ませるの  
限る。」

そう言い、サスケ達はダンゾウに会いに行く。

「つで、このわしになんのようだ。」

「ダンゾウ・・・アンタに頼みたい事がある。」

サスケはヒナタが日向から抜け出したいとそして、その為にまづつ  
したらしいかと言つ。

「・・・なるほどな。」

「どうしたらいい。」

ダンゾウは少し思案したあと思いもしなかつた解答を語り。

「……簡単だ。死ねばいい。」

「……は？」

死ぬ……いきなりの死ぬと言われ困惑した。

「どういう事だ！ てめえダンゾウー、ふざけた事ぬかすと九尾を開放するぞ！」

「までナルト。ダンゾウの事だ。なにか考えがあるのだろう。違うか？」

ナルトは怒り突っ掛かるがサスケが制す。  
サスケはダンゾウの考えが読めてきたようだ。

「その通りだ。日向ヒナタ、お前は日向の鎮から逃れたいのだろう？」

「ええそうよ。」

「だつたら簡単だ。死んだ事にすればいい。」

「なるほど。そういう事か。」

「物分かりがよくて助かる。要するに、表立つて死んだ事にすれば日向との繋がりは断ち切れる。」

簡単に言えば、暗部に属する日向ヒナタは生きているが、日向家の

娘日向ヒナタは死んだという事にする。

分かりやすくて、表のヒナタは消えるといつ事だ。

「さすがはダンゾウ、大した策だ。しかし、問題がある。死体はどうするんだ？」

「心配はいらんだろ。日向ヒナタの死体を探さんだろ。他の忍はともかく、日向が探すふりをしてきりのいい所で捜索を中止するだろ。」

ダンゾウは日向がヒナタをビリみてるかよくわかる発言をする。ヒナタは不機嫌になるが、ダンゾウの策に賛同している。

「決まりだな。」

「なあ、ここの際俺も死んだ事にしてくれねえかな？」

「俺もそつしたいが、さすがに俺が死んだとなれば、怪しまれるからな。俺は無理だな。」

「うづまきナルトが死ぬのは構わんが、同時期だとまずい。時期をずらしてから死ぬ事にしろ。」

「わかった。」

「それじゃあ、作戦実行だな。善は急げだ。」

サスケ達は、ダンゾウの策に乗る。

こうして、日向ヒナタの死・・・作戦名『ヒナタ表死』<sup>ひょうし</sup>が決行された。

次の日、里中に日向ヒナタが死んだという事件が広まつた。

死んだのは自殺だとか事故死だとか他殺だとか噂が飛び交う。

日向はヒナタの死体搜索をするが、案の定僅か三日で搜索を止めた。

そしてその日、日向家では宴会が行われていた。

これを知るのは、サスケ達と根に属する暗部のみ。

それから数日がたつたある日、ナルトが死んだ。

もちろん、この死は偽装だ。

この死も里中に広まる。

ナルトの死は里中の人间達は喜んだ。

あの化け狐が死んだつと言い合い喜びはてには里中で密かに宴会をやる所があるくらいだ。

ナルトには搜索すらなしだ。

怪しいと踏んだ火影は密かに調查をする。

その後、サスケ達を見つけ真実を知つた。

理由を聞くと文句を言つたがすぎてしまつたのでどうしようもなかつた。

こうして、ナルトとヒナタは表では死に裏へと徹することになる。

## 表での死（後書き）

二人は表から消え、裏で生きる事を決意。  
自由への道がまた一步進む。

次回は原作開始・・・

\* 次回から前書きと後書きにメインキャラとオリキャラのプロフィールを一人づつ書いていきます。

## 原作の始まり（前書き）

うちは一族の滅亡から六年がたつた。  
ついに物語は始まる。

原作とは徐々に変わっていく。

うちはサスケ（暗部名、黒鬼）

CV 中村悠一

容姿・長髪の黒髪。服装は仮面ライダー カブトのやさぐれた矢車の服装。

性格・表、明るく真面目。誰とも仲良くなれる優しさがある。

裏、冷酷で情け容赦がない。敵には容赦なく、一瞬で殺す戦いをする。

素、冷静でナルトとヒナタと兄イタチ以外にはぞんざいな扱いをする。三人以外はどうでもいいと考えている。ナルトとヒナタの幸せを第一に考えている。

備考・・スレた一般人サスケに転生憑依。ナルトとヒナタが好きで二人が幸せなら他はどうでもいい。かなり修業したため、実力は曉のメンバークラス。忍術は火遁と雷遁を主に使う。体術はトップク

ラスで主に剣術を使いこなす。武器は刀で九尾の妖気チャクラをつかつて作り上げた妖刀『魔夜<sup>まや</sup>』。居合い斬りや連續抜刀を得意。今は火影とダンゾウの暗部。

## 原作の始まり

闇が包む木の葉の森、その中に数人の忍が木の枝を飛び乗りながら駆けている。

額宛ては草隠れのマーク、彼等は草隠れの忍。

彼等の目的はわからない。

おそらくは里の旧家もしくは名家の子でも誘拐しにきたのだろう。数人の忍は緊張しながら森を駆ける。

「 「 「 「 ... ... 「 「

その時、何かが飛来する音が聞こえた。

何事かと後ろを振り向くと後ろにいた一人の忍がいなくなっていた。下を見ると頭にクナイが刺さっており、血が流れて死んでいた。

残った忍は慌てて警戒する。

すると、後ろから何かが木の枝に着地する音が聞こえる。

振り向くと一人の暗部が立っていた。

背丈から見ると大人だが、顔に付けた面は異様だった。

「鬼の面・・・だと!？」

そう、この暗部の面は鬼の面だ。

普通は十一支の面をつけるのだが、草隠れの忍は何故と考える前にこの暗部の正体に気付いた。

「ま、まさか。貴様が最近木の葉を守る鬼の暗部か！」

一人の忍がそう言つと残りの忍達は警戒レベルをあげる。

「だが、相手はたつた一人！こつちはまだ四人いるんだ！数ではこつちが勝つてゐるんだ！奴を殺るぞ！」

草の忍達はクナイを持ち身構える。

鬼の暗部の手には刀が持たれていた。

鬼の暗部が消えた。

草の忍達は周りを見渡す。

後ろに振り向くとそこに鬼の暗部がいた。

草の忍達は構えるが何かがずれた音が聞こえる。

真ん中にいた忍が右を向くと右にいた忍の首がずれ、顔が胴体から離れ落ち、切れた部分から血が噴出す。

忍達は驚愕した。

いつ斬つたのかわからなかつた。

また鬼の暗部が消え、今後は左の忍の前に現れ胴体を真つ二つに切り裂く。

さらに隣にいた忍も袈裟斬りで斬り伏せる。

最後の一人は逃げようとするが、鬼の暗部の手裏剣が両腕と両足に刺さり動けなくされる。

懇願をする間もなく最後の一人は唐竹で斬られる。

鬼の暗部は刀を振るい血を拭い鞘に戻す。

そのまま、鬼の暗部は地面に降り夜空を見上げる。

その時、後ろから二人の忍が現れる。

この二人も暗部だ。

面は一人は狐、もう一人は狼。

「終わったか。」

「ああ・・・サスケ。」

鬼の面を外し、素顔を晒しだしす。

長い黒髪の青年、そう彼は変化したサスケ。

「暗部の時は黒鬼だ。<sup>くろき</sup> 本名を言つなナルト。ヒナタも止めよう。」

狐の面の暗部が面を外す。

金髪の青年に変化したナルト。

狼の面の暗部も面を外す。

長い黒髪で白目の美女に変化したヒナタ。

彼等は暗部として活動している。

「悪い悪い。それから俺は金狐だ。<sup>きんこ</sup>」

「私は銀姫よサスケ君。<sup>ぎんき</sup>」

「そつちが先に言つたのだろうが。まあいい、そつちも終わったのならこつちも終わらすか。・・・天照!」

サスケは万華鏡『輪眼』『天照』で死体となつた忍達を燃やす。消し炭となつたのを確認して、サスケ達は帰還する。

「それにしても明日だね。」

「明日?・・・ああ、アカデミー卒業試験か。」

「どうするのだろうな。もしかしたら合格しうとか言われるんじや

ねえだらうつな。」「

「言われるだらうつな。一応旧家と名家の護衛だからな。旧家はともかく名家の子を守るのは嫌だがな。」「

「俺も嫌だぞ。」「

「私も。」「

「まあ、ぐだぐだ言つてもしようがない。帰還したら聞けばいいだけの話や。俺はさつと帰つて寝たい。だからさつと帰還するや。」「

サスケ達は闇の木の葉の中に溶け込んだ。

あれから六年がたつた。

今日はアカデミー卒業試験。

教室にいるアカデミー生達は緊張した面持ちでイスに座つて友達と話をしたりしている。

そこに後ろの扉が開く。

「よつおせよつ。」「

「おはよウジヤエコモク。」

「よウ！渦風に波巻。今日も一緒に登校か。」

教室に入ってきたのはナルトとヒナタだ。

もちろん偽名でナルトは渦風ナル、ヒナタは波巻ヒナと名乗る。実は火影から旧家と名家の護衛の任務を受けており、アカデミーに入学する事になった。

表で死んだ事になつているナルトとヒナタはさすがに無理だと思つた。

しかし、火影の口から出た言葉はとんでもない事だった。

それは、二人に偽名を付けアカデミー生に成り済ませと言つてきたのだ。

さすがにナルトとヒナタは呆れ果てるが、任務なためと断る理由もなかつたため承諾した。

ちなみに偽名の名字はナルトの父と母の名字を使つている。

「ナル。ヒナ。」

「サスケ。」

教室の窓際で最後尾の席にいるサスケがナルトとヒナタを呼ぶ。ナルトとヒナタはサスケのいる席の隣に座る。窓際からサスケナルトヒナタという順に座る。

「結局合格しなきやならなくなつたな。」

「全く嫌だぜ。合格はともかく、班決めでの二人と一緒になつた日なんか俺任務降りるぞ。」

「私も。」

「もちろん俺もだ。そうならない事を祈るうぜ。」

サスケ達は組みたくないというその二人をチラツと見る。  
一人は、黒髪で鋭い目付きで近寄るなオーラを醸し出す少年うちは  
ユラム。

名の通りうちは一族の者での悲劇の生き残り。

うちは一族はサスケとイタチをのぞいて全滅したと思いまや何故か  
この少年が生き残っていた。

何故生き残ったのかわからない。

ただ、それを皮切りにユラムはサスケに殺氣を放ち、さらには殺そ  
うとしてくるが、ナルト達がいたため断念する。

サスケ自身はあんまり興味がない。

むしろ無視している。

もう一人は日向ハナビ。

何故かハナビはアカデミーに通つていてしかもサスケ達と同じ学年  
扱い。

誰もが分かる通り日向家のコネで七歳でアカデミーに通う。

もちろん、姉であるヒナタの存在を知らない。

しかも、父ヒアシの血を日向の傲慢な血を引き継いでおり日向こそ  
最強だと自負して疑わない。

そのため、ハナビは他人を見下している。

こんな二人だが、一応は護衛目標であるため無下にはできない。

「まあ、そんな事はないだろう。俺達三人が別れる事はない。俺は  
そう信じている。」

「そうだな。」

三人はしばらく談笑を続ける。

その後、試験が開始し順番に名前が呼ばれていく。

「次、うちはサスケ！」

「はい。」

サスケは立ち上がり、試験する教室に移動する。  
教師一人の前に立ち、チャクラをねり印を結ぶ。

「分身の術！」

煙が現れ、本体の周りに三人の分身体が現れる。

「うん。合格だ！」

額宛てをサスケに渡す。

サスケは礼をいいさつと教室から出る。

その後、ナルトとヒナタも合格した。

放課後、サスケ達はアカデミーの正門前でどうするか考えていた。

「さて、どうする？俺はこのまま帰るが。」

「私は少し買い物をしてから帰るわ。そろそろ材料も少なくなつて  
きたからね。」

「なら、俺も同行するぜ。」

「うん。よろしくね。」

「決まりだな。そんじゃ あお先に。」

「うん。」

「じゃあな。」

サスケは家に帰り、ナルトとヒナタは「」のまま買い物に出かけた。  
ちなみにサスケ達の家は二つある。

一つは居住区の中にあるかなり高価な家。

これは表での実家だ。

もう一つは離れた木の葉の森の中にある。  
こちらは暗部としての家だ。

どちらも一軒家としてはかなりよくできている。

その森はほとんど人がこない森だ。

だから、住むにはうってつけだ。

今日のサスケは表のほうの家に帰る事にした。  
数時間後ナルトとヒナタが帰ってきて「」飯を食つ。

そして夜、三人に任務が下された。

## 原作の始まり（後書き）

原作であつた最初の話。

これにはちゃんと裏の話がある。

次回は影の戦い・・・

うずまきナルト（暗部名金狐—偽名渦風ナル）

CV竹内順子

容姿・原作と同じ。頬の髭はない。服装は仮面ライダー・カブトのやさぐれた影山の服装。

性格・表、明るく人懐っこい。

裏、残忍で冷酷。殺しは一瞬で殺るがジワジワいたぶり殺すかのどちらか。

素、ヒナタが大好きでヒナタ第一主義。ヒナタに弱く、ヒナタの言つ事は信じる。ヒナタを苛める者に容赦しない。

備考・原作の主人公。サスケに助けられ、サスケとヒナタとイタチに出会い。ヒナタとは恋人同士でサスケとイタチは親友関係。ヒナタを心の底から愛している。サスケには恩を感じている。九尾を制御できる。両親とはすでにあつていて、忍術は火遁と風遁を使い

こなす。実力はサスケと同クラス。武器はギザギザの刃がついた妖  
大刀『酷撃』。大刀にチャクラを込めるとギザギザの刃が動きチエ  
ンソーのようになる。

## 影の戦い（前書き）

表の戦いがあれば裏の戦いがある。  
光の戦いがあれば闇の戦いがある。  
誰もが知らない戦いも存在する。

日向ヒナタ（暗部名銀姫—偽名波巻ヒナ）

CV水樹奈々

容姿・原作と同じ。偽名時は黒のコントラクトをつける。服装は動きやすい白の服で白のロングジャケットコート。

性格・表、少し内気だが優しい。

裏、冷静で敵には冷酷。ムダな事はしない。

素、ナルトの事を心の底から愛しておりナルト第一主義。ナルトの為ならどんな事もする。日向を見限つておりもうどうでもいい。しかし、心の奥底では恨みと憎しみがありいずれ自らの手で滅ぼしたいと思っている。

備考・元日向家長女。最初は力がなかつたがサスケとナルト出会いともに修業したおかげでメキメキ強くなる。しかし日向の醜さと父親の自分の扱いをしり日向家を見限る。表では死んだ事になっている。実力はサスケとナルトと同等の強さ。忍術は水遁と風遁。

体術はトップクラスで柔拳最強の使い手。武器は妖鉈『白魅』、チヤクラを流し込む事で先端から薄く鋭いチヤクラの刃ができ流し込んだ分だけ伸びる。よく見ないと見切れない。

とある木の葉の森の中である中忍一人とアカデミー生一人が事件を起こしている。

そこからかなり離れた場所で約三十人の忍が森を駆けていた。

額宛ては霧隠れの忍。

霧隠れが木の葉に来た理由はこの先にいる裏切った教師の援護しにきたのだ。

三十人の忍が森を駆ける。

「あのミズキって奴遅いな。何をしてやがる。まさか、気付かれたのか? だとしたら厄介だぞ。我々の存在がばれる。ここは一つ様子を見に。」

「その必要は無い。」

その時、前方から声が聞こえた。  
全員が止まり前方を見る。

前方の闇から三人の暗部がいる。

三人の暗部・・・そうサスケ達である。

サスケ達はダンゾウからミズキが霧隠れと繋がっているという情報を知りその霧隠れを始末しろつと任務を授かった。

サスケ達は任務を受け三十人の霧隠れの忍と対峙する。

「鬼と狐と狼の面。まさか、貴様らがあの暗部か。噂は聞いてるぞ。」

霧隠れの忍の一人がそう言いながら全員に警戒するよう指示をだす。

「・・・何も言わないか。貴様らを殺せば里の戦力は下がるというわけだな。」

「言いたい事は終わつたか。そろそろ殺らしてもいい。」

サスケ達は武器を出し構える。

「散開！！」

霧隠れの忍十人づつが別に跳ぶ。

サスケ達も同じように別れて跳ぶ。

十人の忍の前にサスケが立ちはだかる。

サスケは刀を構え、瞬身の術で懷に現れ一気に三人を切り裂く。

次に連続の斬撃で四人をハつ裂きにする。

残り三人になり、霧隠れの忍は慌てはじめる。

間髪を入れずサスケは一人の心臓に刀を突き刺す。

刺された忍は口から血を吐き出す。

抜いて逆袈裟で斬る。

あと二人となり、二人は距離を取り手裏剣やクナイを投擲する。

しかし、サスケはそれをほとんど躱し、時には刀で防ぐ。

そのまま走り、左の忍を右切り上げで殺す。

「クソツ！水遁・・・ぐああつ！！」

最後の一人が術を使おうとするが、両手の甲に手裏剣が刺さつてい

た。

苦痛で顔を歪めてる間にサスケは懐に入り斬撃を二回し、絶命させる。

サスケは刀を振るい鞘に納める。

死体を消し、サスケは木の枝に上がり夜空を見上げる。

サスケが敵と交戦しているのと同時期、ナルトは太刀を構え、挑発する。

「オラ！こいよー！ビビッてるのか！？」

「貴様～！！」

十人の内一人が頭に血が上りナルトに向かって突っ込んでくる。

「遅えよー！」

ナルトは太刀を振るい二人まとめてバッサリ切り裂く。それを見た残りの忍は挑発に乗らないよう警戒を強める。

「こないのかよ。だつたらこいつから行つて殺るよー。」

ナルトが瞬身の術で近付き一人を縦に真つ二つにする。

そのまま豪快に振るいまた一人、また一人と殺していく。六人目を斬ろうと袈裟斬りで肩を斬ろうすると、途中で止まる。

「あん？ チツ！ てめえ、 チャクラで俺の太刀を！」

「ククツ！ これならてめえの背後は隙だらけだ！」

背後にいた二人の内一人がそう言つと二人はナルトの背後を攻撃しようとクナイを持って近付く。だが、ナルトはニヤリと笑う。

「あめえよ！ バカが！ ！」

ナルトは太刀にチャクラを流す。すると太刀の刃がチーンソーのように回転し動く。ギヤリギヤリギヤリと音が森に響き止まつっていた太刀が動き敵の中身が削られ血が噴き出しながら裂かれていく。裂かれた忍は声にもならない悲鳴をあげながら絶命し、太刀はそのまま右の忍の脇腹に刺さる。

「ぐきりゅああああああああああ！」

右の忍は悲鳴をあげる。

それはそうだ。

ナルトの太刀はまだ回転しているのだ。

そのまま刃が当たり削られながら斬られているのだからその痛みは尋常じやない。

血がどんどん噴き出され肉が飛び散る。

それを見た最後の一人は恐怖に染まる。

なんとか逃げようとするが、両足にクナイや手裏剣が刺さり前のめりに倒れる。

顔だけを後ろに振り向けるといつの間にか中身が飛び散らせて死んだ忍を放置しながらこっちに体を向けているナルトがいた。

最後の忍は恐怖に染まり怯える。

ナルトはゆっくり近付き、敵の目の前に立ち、太刀を敵の背中に突き刺す。

そこからナルトの解体ショーが始まった。

削られる音と敵の悲鳴だけが森の中で響いた。

ナルトが敵の解体ショーをしている頃、ヒナタも残り一人となつた敵と対峙していた。

ヒナタの右手には鉈が握られている。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ、クソツ！どうなつてやがるんだ！」

「何故なんだ！何故離れた所から鉈を振つてるだけなのに仲間が殺られるんだ！？」

敵一人はわからないといった表情でヒナタを睨み付ける。

「こないのですか？なら、またいきます。」

ヒナタはその場でまた鉈を唐竹のように振るう。

すると、右の敵が縦に斬られ血飛沫が舞う。

そのまま倒れ絶命した。

最後の一人が鉈をジツと見つめる。

すると、うつすらだが、鉈の先に伸びているものを見つけた。

「！」、これは？！、そ、そ、うか！アレはチャクラ！そ、そ、うか！チャク

ラで伸していたのか！」

「へえ、気付きましたか。」

そう、ヒナタの鉈の先にはチャクラの刃ができている。チャクラ刀の一種で鉈にチャクラを流し込み薄く鋭いチャクラの刃ができる。

かなり薄くよく見ないと見えない。さらに威力も高い。

「ふつ、ならばそれさえ氣をつければ貴様」ときびつという事はない！」

「・・・」

ヒナタは敵の言葉に乗る事もなく鉈を構える。ヒナタは鉈を横に振るう。

敵はそれをしゃがんで躰す。

躰した直後、敵はヒナタの懷に飛び込もうとする。

「もうひ・・グフッ！！」

しかし、その前にヒナタが先に懷に入り左の柔拳を叩き込んだ。敵はその場でうずくまり動くなくなる。

ヒナタは正面に立ち鉈を振り上げる。

そのまま鉈を振り下ろし頭からかち割る。

顔面は潰れ胸元までパックリと中身が見え開いている。

ヒナタはそのまま死体を燃やし、ナルトとサスケと合流する。

サスケ達は合流し、死体を焼却する。

合流後、サスケ達はダンゾウに報告に帰還する。

「終わつたし報告して帰るか。分身体を消して結界を消さないとな。

」

「あつちはいいの?」

「俺達の管轄外だ。どうでもいい。それより数日後に班わけがあるから俺達が一緒になれるよう直訴しに行こうぜー。」

「そうだな。」

サスケ達は結界を消して、帰還する。

その日、おちこぼれのアカデミー生が教師の額宛てをもらい試験卒業をもらつた。

## 影の戦い（後書き）

班わけ・・・忍の運命を決める。

誰と組むのか、それは誰もわからない。

次回、班わけ・・・

うちはコラム

CV 杉山紀彰

容姿・・・原作のサスケと同じ容姿同じ服装をしている。

性格・・・原作のサスケと同じだが若干短気で自信過剰。

備考・・・原作のサスケポジションのオリキャラ。六年前のうちは一族の滅亡の時、イタチに殺す価値無しと言われ助かる。（怯えて逃げまくり命乞いをしたためイタチに呆れられたおかげ）その後、憎しみと復讐のためイタチとサスケを殺すと決める。サスケを狙うがナルト達がいたため断念する。うちはこそ最強だと信じて疑わない。自意識過剰でプライドが高い。実力は原作のサスケより少し低い。忍術は火遁。

## 班わけ（前書き）

誰と組む？

それはバランスよく、そして決まっている。

遠野トモル

CV 優希比呂

容姿・黒髪で黒目。背はナルトより少し高い。服装は原作ナルトの服で色違い。色は灰色。

性格・原作のナルトと同じ。語尾に「～ア」や「～オ」と伸した言い方をする。

備考・原作のナルトポジションキャラ。九尾がないかわりにチャクラの量がかなり多い（中忍の上クラス）。アカデミーの成績はドベで皆からおちこぼれと呼ばれている。サクラが大好き。実力は下忍の下。使える忍術は影分身と基本忍術のみ。

数日がたち、サスケ達と合格した者達はアカデミーの一つの教室に集まっていた。

そこにドアが開き一人の少年が入ってくる。

「おひおい、おちいぼれがなんでここにいるんだよ。」

「おひいぼれくーん。今日は授業はないぞー。」

「つむせえーーの額宛てが見えないのかアーー今日から俺も下忍だアー！」

少年の名は遠野トモル。

アカデミーきつてのおちいぼれで数日前の事件に関与していくそのおかげで額宛てをもらつたのだ。

サスケ達は関与しなずいつもの端の席で談笑する。

十分後、教師海野イルカが教室に入る。

「全員、席に座れよ！・・・さて、今日から君達はめでたく一人前の忍者になつたわけだが・・しかし、まだまだ新米の下忍。本当に大変なのはこれからだ！」

イルカが新米の下忍達にこれから今後三人一組になり各班に一人ずつ上忍の先生が付き、指導の元任務をこなしていくと言つ。しかも、班はバランスよくするためあつちで決めたようだ。それを知り新米の下忍達は声を荒げ文句を言つ。

サスケ達は新米の下忍達を小バカにしたような表情で見つめる。班の発表が言い渡される。

「・・・次、第七班。春野サクラ、遠野トモル、それどつちはコラム。」

第七班のメンバーが発表された。

自分の名が出た瞬間トモルは喜びサクラは沈むが、コラムの名が出たら逆にサクラは喜びトモルは沈む。もちろんトモルは怒るが、コラムは一番の成績トモルはドベと言われる。

「次の班を言つぞ。」

第八班は日向ハナビ、犬塚キバ、油女シノとなる。

第十班は原作とかわりない。

「最後、第十一班。うちはサスケ、波巻ヒナ、渦風ナル。」

班わけの発表が終了し、午後から上忍の先生が来るからそれまで解散するようイルカはそう言う。

サスケ達は屋上で昼飯を食い、午後までのんびりする。

午後になり、サスケ達は教室に戻り上忍の先生が来るのを待つ。数分後、一人の上忍が教室に入ってきた。

「第十一班。俺が担当上忍だ。俺について来い。」

担当上忍に呼ばれサスケ達は教室を出る。

アカデミーから少し離れた建物の屋上に集まる。

「自己紹介をする必要は無いな。三人の名前は知っている。」

「アンタが俺達の担当上忍か。アンタ・・暗部だな。しかもダンゾウの部下だろ。」

「そうだ。俺の名はラウリ。」

このラウリはダンゾウの部下で数日前にサスケ達は一緒に班になれるよう火影に直訴しに行き、担当上忍を誰にするが困った所、ダンゾウが自身の部下から一人をサスケ達の担当上忍にすると言つてきた。火影は許可をし、結果ラウリが担当上忍になった。

「さて、本来ならテストをするのだがお前達の実力は知ってるからやる必要は無いな。だから合格にする。」

「いいのか?」

「構わんさ。俺の実力ではお前達に勝てん。だからムダな事はやらない。」

あつさりサスケ達は下忍となつた。

これから表のサスケ達が動く。

なお一日後、第七班と第八班と第十班が晴れて下忍になつたようだ。

## 班わけ（後書き）

下忍になり任務をする。  
それはあまりにつまらない。  
それから数ヶ月。  
次回、中忍試験・・・

ラウリ

CV 緑川光

性格・・冷静で達観している。

備考・・オリジナルキャラ。ダンゾウの部下の一人でサスケ達第一班の担当上忍。根で育てられており高い実力を持つ。ダンゾウの部下だがサスケ達を尊敬しており、賛同している（実は、サスケ達は暗部内ではファンクラブがいるほど人気があり信奉者がいるほど有名）。視野が広く味方だろうが敵だろうが正しい評価をくだす。実力は暗部としてはトップクラス。忍術は土遁と雷遁。

## 中忍選抜試験（前書き）

下忍になり数ヶ月、ついに始まる中忍になるための試験。

日向ハナビ

CV: 浅井清二

容姿・原作と同じ。服装は袖が長い白の服と膝までのズボン。

性格・傲慢で他人を見下す。冷静だが辛口で辛辣。

備考・原作では日向家次女だがここでは日向家次期当主。日向家や父の教えにより日向家が最強だと信じて疑わない。そのため他人と自分は違う選ばれた忍だと思い込んでいた。実力は七歳ながら下忍の中。柔拳が得意。

正式に下忍になつて早数ヶ月がたつた。

下忍になつたサスケ達は下忍が受けるランクの任務をこなしつつ暗部の任務もこなしてきた。

表の任務はサスケ達にとつては暇でしかなかつた。

ちょうど八つ目の任務を終え、暗部任務に赴こうとした時、三人はラウリに呼ばれた。

「お前達、実は今度中忍選抜試験をするんだが選抜する事にした。」

ナルトとヒナタは、は?とした表情でラウリを見る。

サスケは、もうそんな時期かと思い出した。

原作知識が薄れていつてるため重要な部分しか覚えていなかつた。

「そつか。 . . で、それが目的ではないのだろ?」

「さすがはサスケ。鋭いな . . . ここからが本当の話だ。その中忍試験に砂と音が木の葉を襲撃するらしい。」

木の葉を襲撃 . . . それを聞いたサスケ達は、そうかつといつた表情でみる。

「音つて確かに最近できた小さな里だつたよな。そんなとこがなんで

砂と手を組めるんだ?」

「その音の創設者はあの大蛇丸だ。」

大蛇丸・・・木の葉の伝説の三忍の一人にして抜け忍。  
実力はトップクラスで上忍や暗部クラスでは歯がたたない。

「大蛇丸・・・あの大蛇丸か?」

「そうだ。」

「・・・なるほどな。」

「あの大蛇丸の事だ。それだけじゃないだろうな。」

「・・・つまり、俺達の任務は旧家の護衛か。」

「そうだ。おそらく新人全員参加するだろうな。」

サスケ達は断りたい気持ちだったが護衛任務があるため、断る事が  
できない。

「・・・ふう、わかつた。中忍選抜試験に参加してやる。」

「志願書は明日渡す。解散!」

次の日、志願書をもらつ。

そして中忍選抜試験当日、サスケ達は試験会場である学校に行く。二階で何か揉め事があつたが無視してさっさと会場のほうに行く。入ると沢山の下忍がいた。

それを見たサスケ達は。

(多一)

(うざつ一)

(こんなにいるんだ。少ないと思つてた)

かなりうざそうに見つめる。

その時、入り口の扉が開き誰かが入ってきた。

入ってきたのは第七班だった。

サスケ達は近くの壁に寄る。

「ゴラムく～ん！」

第七班のところに第十班さらに第八班が集まる。

「これで護衛対象は揃つたな。」

サスケは小さな声で言つ。

三班達はふざけあいながら談笑する。

「おい君達！もう少し静かにした方がいいな・・・

すると、誰かがサスケ達に声をかけてきた。

「君達がアカデミー出たてホヤホヤの新人12人だろ。かわいい顔してキヤツキヤツて騒いで・・・まったく。ここは遠足じゃないんだよ。」

「誰よ～～アンタ? ハラモーに!」

声をかけてきたのは眼鏡をかけた木の葉の忍だ。

「ボクはカブト。それより辺り、特に後ろを見てみな。」

「辺り?」

『『『?』』』

サスケ達三人以外が後ろを向くと雨隠れの額宛てをした下忍達がサスケ達を睨み付ける。

「君の後ろ・・・あいつらは雨隠れの奴等だ。気が短い。試験前でみんなピリピリしてる。どつかれる前に注意しこうと思つてね。」

第七班と第八班と第十班は後ろの雨隠れの睨みに驚く。だが、サスケ達はカブトを見る。

「どう見る、ここつ。」

「つまく隠してるようだけど、ただの下忍じゃないな。」

「何者かしら?」

サスケ達はカブトがただ者じゃないと気付く。

「まー仕方ないか。右も左も分からぬ新人さん達だしな。昔の自分を思い出すよ。」

「カブトさん……でしたっけ。じゃあ、あなたは一回目なんですか？」

「いや、七回目。」の試験は年に一回しか行われないからもう四年目だ。」

「それだけの実力なら合格してもいいはずなのにな。」

「どつかのスパイってところですか。」

ナルトとヒナタが小声で話す。

「じゃあ、かわいい後輩にちょっとだけ情報をあげようかな。この忍識札でね。」

「忍識札？」

「簡単に言えば情報をチャクラで記号化して焼きつけてある札のことだ。」

カブトのその言葉を聞き、サスケ達三人はますます目を細める。

「確定だな。完全に何処かの里のスパイだな。」

「けど、何処の里？」

「……音だな。そこしか考えられないな。」

サスケ達はカブトが音のスパイだと確定した。

「そなカードに個人情報が詳しく入ってるやつ……あるのか？」

「フフ・・・気になる奴でもいるのかな。もちろん今回の受験者の情報は完璧とまではいかないが焼きつけて保存している。君達のも含めてね。情報はあるかい？検索してあげよう。」

「砂隠れの我愛羅・・それに木の葉のロック・リーって奴だ。」

「なんだ。名前までわかつてゐるのか。それなら早い。」

「グラムが一人の名を言つとカブトは忍識札から一枚引く。」

「見せてくれ。」

ロック・リーと我愛羅の情報がカブトから聞き、忍識札に載つてゐる物を見る。

「木の葉・砂・雨・草・滝・音・・・今年もそれぞれの隠れ里の優秀な下忍がたくさん受験に来ている。ま、音隠れの里にいたつては近年誕生した小国の中なので情報はあまりないが、それ以外は凄腕ばかりの隠れ里だ。」

「つ、つまり・・・」に集まつた受験者はみんな・・・」

「そうーリーや我愛羅のような、各國から選りすぐられた下忍のトップエリート達なんだ。そんなに甘いもんじやないですよ。」

それを聞き新人達は強張つた表情になる。しかし、サスケ達はそうでもなかつた。

別にどうでもよかつたし、たとえ下忍のトップエリート達だとして

も相手にならないので興味もなかつた。

その時、トモルが下忍達にふかした。

それを聞き、全下忍がトモルとサスケ達を睨みつけた。

トモルはサクラに叱られる。

その時、下忍の人込みから三つの影が動く。

カブト他実力のある下忍はすぐに気付く。

一つの影がジャンプしカブトに向けてクナイを投げる。

カブトは気付き、後方に下がつて躲す。

そこにもう一つの影が下から現れカブトの前に出る。

(こいつら音隠れの……)

影の正体は音隠れの忍だ。

音隠れの忍は右の攻撃を仕掛けるがカブトは紙一重で避ける。

その瞬間カブトの眼鏡が割れた。  
さらに。

「うええつ！」

カブトはその場で嘔吐した。

カブトの前に三人の音隠れの忍が立ち見下ろす。

一人目は顔に包帯を巻き、二人目はつんつん髪の黒髪、三人目は少女で髪が黒でストレートのロング。

「カブトの兄ちゃんん！」

「大丈夫！？」

「・・・ああ・・大丈夫さ・・・・・・」

「なーんだ。大したことないんだ。四年も収穫してゐるベトランのくせに。」

「アンタのカードに書いたきな。音隠れ三名、中忍確定つてな。」

音隠れ三人を見、特に包帯を巻いた少年を注目し何かネタがあるのか警戒をする。

「くだらん。カブトも何故わざと食ひりや。」

「自意識過剰すぎ。バカとしか言こよつがないな。」

「技を出す前に殺ればいいだけ。所詮下忍のトップヒーローだとしどもこの程度ね。」

サスケ達は音隠れと下忍のトップヒーロー達を完全にじりつどもいと感じで見つめる。

「静かにしやがれー、じぐわれヤローーどもがーー。」

その時、黒板のほうから怒声が響き煙が出る。ついに中忍試験が始まつた。

## 中忍選抜試験（後書き）

試験が始まった。

最初の試験は・・・ペーパーテスト。

次回、第一試験・・・

## 第一試験開始（前書き）

最初の試験。

それは言葉のままではない。  
ちゃんと裏がある。

## 第一試験開始

黒板の前に現れたのは、多数の中忍と特別上忍森乃イビキだ。拷問と尋問のスペシャリストだ。

「待たせたな・・・中忍選抜試験第一の試験、試験官の森乃イビキだ。」

イビキの外見に多数の下忍がビビる。

「音隠れのお前らー試験前に好き勝手やつてんじゃねーぞ、コラ。いきなり失格にされてーのか。」

「すみませんねえ・・・なんせ初めての受験で舞い上がつてしまして・つい。」

「フン・・・いい機会だ言つておく。試験官の許可なく対戦や争いはありえない。また、許可が出たとしても相手を死に至らしめるような行為は許されん。オレ様に逆らつよつたは即失格だ。分かつたな！」

イビキは下忍全員に睨み付ける。

ほとんどの下忍が畏縮する。

後ろにいる中忍達がニヤニヤと薄ら笑いする。

「では、これから中忍選抜第一の試験を始める。志願書を順に提出して代わりにこの・・・座席番号の札を受け取りその指定通りの席に着け！その後、筆記試験を用紙を配る・・・」

「？・？・？・ペツ・ペーパーテストオオオオオオオー！」

イビキの言葉にトモルは絶叫する。

下忍達は志願書を渡し、席に座る。

サスケは最後尾の真ん中の席、ナルトは最後尾から三つ目で真ん中の席、ヒナタはナルトの右隣りの席に座る。

「試験用紙はまだ裏のままだ。そして、オレの言つ」とよく聞くんだ。」「

イビキがルール説明を始める。

「この第一の試験には大切なルールつてもんがいくつかある。黒板に書いて説明してやるが、質問は一切受け付けんからそのつもりでよーく聞いとけ。」

「ルール？」

（質問を受け付けないって）

「第一のルールだ！まず、お前らには最初から各自10点ずつ持ち点が与えられている。筆記試験問題は全部で10問各1点。そして、この試験は減点式となってる。つまり、問題を10問正解すれば持ち点は10点そのままである。しかし、問題で3問間違えれば持ち点の10点から・・・3点引かれ7点という持ち点になるわけだ。」

つまり、一つ間違えると一つ減るということだ。  
全部間違えると〇点になる。

「第一のルール……」の筆記試験はチーム戦。つまり、受験申し込みを受け付けた三人一組の合計点数で合否を判断する。つまり、合計持ち点30点をどれだけ減らさずに試験を終われるかをチーム単位で競つてもらひ。」

ある人物のデコが机にぶつける。  
デコが広い護衛対象外サクラだ。

「ちよ・・ちよっと待つて！持ち点減点式の意味つてのも分かんな  
いけどチームの合計点つてビーハンことお……」

「つるせえーお前らに質問する権利はないんだよー」これにはちゃんと理由がある。黙つて聞いてろー分かつたら肝心の次のルールだ。」

サスケ達はサクラをやつぱりどうしようもないカスだと思った。

「第二に試験途中で妙な行為……つまり、カンニング及びそれに準ずる行為を行つたところにいる監視員たちに見なされた者は……  
その行為一回につき持ち点から2点ずつ減点させてもらひ。」

その言葉にほとんちは気付いた。

「やつだーつまり、この試験中に持ち点をすつかり吐き出して退場してもらつ者も出るだらひ。」

筆記問題以外にも減点の対象を作つてあるのだ。

監視員である中忍たちはいつでもチェックしてるとこつた目付きで

睨む。

「無様なカンニングなど行つた者は自滅していくと心得てもいおひ。仮にも中忍を目指す者、忍なら・・・立派な忍りしくすることだ。」

それだけでサスケ達は気付いた。

サスケは原作にこんなのがあったなと思い出した。

「そして最後のルール・・・」の試験終了時までに持ち点を全て失つた者、および正解数0だつた者の所属する班は・・・全班で、道連れ不合格とする！！」

その瞬間みんな驚愕した。

つまり、誰かが持ち点を失つたらその時点で三名一組は失格になる。そのフレッシュヤーは計り知れない。

「試験時間は一時間だ。よし・・・始めろ……」

第一試験が始まつた。

みんな用紙を表にし、問題を読み答えを書いていく。

サスケは始まつた瞬間すぐに写輪眼を使つ。

(思い出した。確かこれはカンニング公認の情報収集戦だつたな。  
さて、ターゲットを見つけるか)

サスケが言つてしまつたが、そつこねは偽装や隠蔽術を使って相手の情報を手にいれられるかの試験なのだ。

先の言葉を思い出してみよ。

カソニーニングを無様なやり方をするなと言つた・・裏の読み方をすれば忍らしくばれないようにカソニーニングしと言つたのだ。さらに減点式もよく考えてみよ。

カソニーニングが発覚し一回につき2点引かれる・・・つまり四回はカソニーニングチャンスあるのだ。

ここまで言えば分かる人はいるだろ。

要するに、ここで試されるのはいかに監視員とカソニーニングをされる者に気取られずに正確な答えを集められることができるのかという事だ。

サスケは原作を思い出したらじてマイベキの言葉を反芻してすぐに理解し行動する。

(ターゲット発見。さて、答えを書いていくか)

同じ頃、ナルトとヒナタもカソニーニングを始めていた。ヒナタが白眼で答えを見、チャクラを使って相手と心で会話する術、心念の術を使ってナルトに答えを教えながら書いていく。

(「のままこけば楽勝だな）

(そうね。それより最後の、10問目の問題どう思つ？）

10問目の問題は開始から45分後に問題が出るらしい。

(気になるな。特に「」「担当教師の質問を良く、理解した上で回答して下せよ。」ってどうこうつ事だ？）

(もしかしたら、これが物凄く重要なかも知れないかも)

(・・・有り得るな。とにかく今は田の前の問題の答えを書いていく  
くぜ)

(うと)

ナルトとヒナタは問題を答えていく。

十五分くらいすぎた頃、ほとんどの下忍がこの試験の意味を理解し行動を開始した。

偽装や隠蔽術を使い解答を見つけていく。

時々監視員にバレ五回ミスり、失格になる者も増えてきた。

それにして、この第一試験はよくできている。

まず誰もがみんな用紙の問題を見る。

しかし、問題が難しすぎてわからない。

もつともこんな問題は実戦では役に立たない。

ただし、それを自力で解くバカもいるが。

そして、誰もがカンニングするしかないと考える。

しかし、監視員がいるためカンニングなんかできない。

そこで試験官の言葉を反芻する。

そして、裏の意味・この試験の意味を理解する。

いまだに理解できないマヌケもいるが。

よくできてる試験だ。

この試験の意味を理解できるよつちゃんと道筋ができている。

情報収集戦はいかに相手の裏の意味を読み取り可能な限り、また見

つからないよう情報を手にいれられるかである。

潜入任務などにはこの力は必要なのだ。

そのため忍にとっては無くてはならない技術の一つだ。

そして、45分が経つた。

「よしーこれから第10問田を出題する。」

## 第一試験開始（後書き）

最後の問題。

それは絶望的なルール。

次回、第一試験突破・・・

## 第一試験突破（前書き）

第10問目・・・あまりにも絶望的なルールが襲う。  
主にサスケ達以外の下忍に。

## 第一試験突破

「よしーこれから第10問目を出題するーー。」

45分が経ち、10問目が出題される。

「・・・と、その前に一つ。最終問題についてのちょっとしたルールの追加をさせてもらひつ。」

突然のルール追加、誰もが緊張して聞くとする。  
その時、扉からトイレに行っていたカンクロウが戻ってきた。  
監視員と一緒に。

「フ・・・強運だな。お人形遊びがムダにならずにすんだなア?」

(「コイツ・・・カラスを見破つてやがる)

(あからさますぎなんだよ)

イビキだけでなくサスケ達も気付いていた。

「まあいい、座れ。」

カンクロウは座る前にこいつそりテマリに解答を書いてある紙を渡す。

「では説明しよう。これは……絶望的なルールだ。」

絶望的なルール……それはいったいなんなのか？

「まず……お前らにはこの第10問目の試験を“受けれる”か“受けない”かのどちらかを選んでもらう。」

「え……選ぶつて……もし第10問目の問題を受けなかつたらどうなるの！？」

「受けないを選べば、その時点での者の持ちはつとなる。つまり失格！もちろん同班の二名も道連れ失格だ。」

そこまで聞いて下忍の誰もが文句を言い、叫ぶ。

「……そして、もう一つのルール。」

（まだあるの！？いい加減にしてよ……）

「受けれるを選び、正解できなかつた場合……その者については今後永久に中忍試験の受験資格を剥奪する……。」

永久に受験資格を剥奪……その言葉に誰もが吠え叫び慌てる。黙つてた下忍も叫んでいた下忍も驚愕し、いきなりのルールに愕然とする。

「そ、そんなバカなルールがあるか！？現にここには中忍試験を何度も受験している奴だつているはずだ！！」

「クク・・ククククツ！」

イビキが笑う。

「運が悪いんだよ。お前らは、今年はこのオレがルールだ。その代わり引き返す道も与えてるじゃねーか。」

『『『え?』』』

「自信のない奴は大人しく受けないを選んで・・・来年も再来年も受験したらしい。」

なんて甘い言葉いや、毒なんだろ?。

受けるを選び間違えれば中忍試験の受験資格は永久に剥奪されずつと下忍のまま、逆に受けないを選べば失格だが中忍になれるチャンスはある。

どちらに転んでも分が悪い。

並の神経では選べない。

「では始めよ!。」の「10問田・・・受けない者は手を擧げる。番号確認後、ここから出でてもいい。」

静寂が包み込む。

誰も手を擧げない。

受けるか受けないか・・・どちらに転んでも分が悪い、それがグルグル頭の中で回ってるのだ。

約数分が経過した。

「お、俺は・・・止めるー受けないー。」

一人が手を挙げ受けないを選ぶ。

それからどんどん下忍が一人一人手を挙げていく。

失格者が増える。

（それにしてもアホだろ。受験資格永久剥奪つて試験官ができるわけないだろ）

（これは齧しだな。こんなんで迷うようじやたかがしれてる）

（だいたいなんで中忍になりたいのよ。そんなの階級といつ名の飾り。それに気付かないようじやね）

サスケ達は別に中忍には興味がない。

それに試験官の考えも読めたので早く終わらないかといった感じで待つ。

「なめんじやねえ――！――オレは逃げねーぞお――」

トモルが机を叩き吠える。

「受けてやるう――もし一生下忍になつたつて、意地でも火影になつてやるから別にいい――！――怖くなんかねーぞお――」

その言葉に誰もがびっくりした。

特に同期の下忍と同じ班の二人は自分達の事を考えないトモルに呆れ果てる。

「もう一度訊く。人生を賭けた選択だ。やめるなら今だぞ。」

「まつすぐ自分の言葉は曲げねえ・・オレの、忍道だあ――」

トモルの忍道に、サスケ達をのぞいた下忍達の不安は一斉にふきとんだ。

（フン、面白いガキだ。こいつらの不安をあつとこつ間に蹴散らしやがつた。・・・78名か、予想以上に残つたか。これ以上粘つても、同じだな）

イビキが監視員達を見回す。

監視員達も同じ気持ちのようだ。

「いい決意だ。では・・・ここに残つた全員に・・・」

残つた下忍達は唾を飲み込む。

サスケ達は見守る。

「第一試験、合格を申し渡す！――！」

合格・・・その言葉に残つた下忍達はぼーぜん、驚愕、あつけ、そんな表情が取り巻く。

「ちよ、ちよっとどうじつことですかー？ いきなり合格なんて！ 10問目の問題はー？」

「そんなものは初めから無いよ。言つてみればさつきの一択が10問目だな。」

イビキがニカツと笑う。

コワもての顔が笑う・・・シユールだ。

誰もが前の9問は無駄だと思った。

約一名が声に出して言つ。

「無駄じやないぞ。9問目までの問題はもうすでに、その目的を遂げたいんだからな。」

『『『？』』』

「君達個人個人の情報収集能力を試すという、目的をな！」

『『『情報収集能力？』』』』

イビキがテストの本当の意味を教える。

誰もが気付いてたのに、眞面目に回答したバカと最後まで気付けなかつたマヌケは気付かなかつた。

「しかしだ。ただ愚かなカソニングをした者は当然、失格だ。なぜなら、情報とはその時々において命よりも重い価値を発し、任務や戦場では常に命がけで奪いわれるものだからだ。」

イビキは額宛てを外し頭を見せる。

そこには火傷やネジ穴に切り傷、拷問の跡がくつきりと残つていた。それをみた大半の下忍はその痛々しい頭に冷や汗を浮かべる。

イビキはすぐに額宛てをつける。

（さすがは拷問と尋問のスペシャリスト。自らもそれを体験してゐからこそその重みだな）

（俺達は基本暗殺だからな。あんまり重要視してないもんな）

（罷であるんであれ、敵が目の前に現れたら殺る。それだけだも

んね)

「でも、なんか最後の問題だけは納得いかないんだけど。」

最後の問題・・・それは、中忍にとつてもっとも重要なファクターなのだ。

「しかし、この10問田こそが・・・この第一の試験の本題だったんだよ。」

『『『』?』』

「いつたい、どうこいつことですか?」

「説明しよう。この10問田は受けるか受けないかの選択。言つまでもなく、苦痛を強いられる一択だ。受けない者は班員共々即失格。受けるを選び問題を答えられなかつた者は永遠に受験資格を奪われる。実に不誠実極まりない問題だ。」

これだけでは、分からぬ。

イビキは分かりやすい例を言う。

敵や情報その他諸々不明、何もわからぬ危険な任務。

命が惜しい、仲間が危険にさらされるから危険な任務を避けて通れるか?

その答えはノーだ。

たとえどんなに危険な任務でも、おりることのできない任務もあるのだ。

中忍といつ部隊長とは、部下を鼓舞し、勇気を出し任務に挑む。それが、必要な資質だ。

「こぞりという時自らの運命を賭せない者。来年があると不確定な未来と引き換へに心を揺るがせ、チャンスを諦めて行く者。そんな密度の薄い決意しか持たない愚図に、中忍になる資格などない……！とオレは考える。」

（サスケは隊長向きだな）

（そうね。私達を引っ張つてくれるもの）

（俺はそういうの嫌いなんだが。俺が引っ張つていくのはナルトとヒナタだけだ）

「入口は突破した。中忍選抜第一の試験は終了だ。君達の健闘を祈る。」

「おっしゃあ――――のつてえ――――」

トモルが叫ぶ。

相変わらずうるさい奴だ。

その時、サスケ達とイビキは窓から何かが近付いてくるのに気付く。

「　　「　　」

その時、なにかが窓ガラスを割りながら入ってきた。

誰もが警戒し、緊張する。

そこに現れたのは、一人の女性だった。

「アンタ達、ようこりんでる場合じゃないわよ――！私は第一試験官みたらしアンコ――次行くわよ次イ――ついてらっしゃい――！」

次は第二試験。

今度はいつたいどんな試験内容か。

## 第一試験突破（後書き）

次は第一試験。

内容は・・・

次回、第一試験説明・・・

## 第一の試験（前書き）

第一試験・・・それは命がけの試験。  
だが、そこに思わぬ人物が。

## 第二の試験

第二試験の試験官アンコはとある森に第一試験に合格した下忍達を連れてくる。

そこは鬱蒼と茂った森が多くなんとも不気味の悪い。

「フフ・・・ここが死の森と呼ばれる所以。すぐ、実感することになるわ。」

「死の森と呼ばれる所以。すぐ、実感することになるわ。なーーんておどしても、ぜんっぜんへーあい！怖くなんかないぞお！」

「死の森か。ここにきたのいつ以来だ?」

「確かに・・三、四年前だつたかな。あの時は大変だつたね。」

「俺達は余裕だな。何するか分からぬけど、これもすんなり合格できそうだな。」

「中忍には興味ないがな。」

トモルは試験官に挑発し、サスケ達三人にいたつては、懐かしむ余裕がある。

「そう。君は元気がいいね。」

アンコは笑う。

だが、なんとも含みのある笑みだ。

次の瞬間、アンコの右手にクナイが持たれそれをトモルの頬に掠めるように投げる。

クナイはそのまま笠をした下忍の横を通り、地面に刺さる。ほとんどの下忍がアンコのいきなりの行動に動けなくなり、アンコはいつの間にかトモルの背後に立つ。

「アンタみたいな子が真っ先に死ぬのよねエ。フフフ……私の大好きな赤い血、ぶちまいてね（ハート）」

「さすがはあの大蛇丸の元部下……変態だな。」

「大蛇丸も変態だつたな。確かホモだつたつけ。」

「ナルト君の前に現れたら、私が殺ります。」

「俺は？」

「サスケ君は一人で殺れるでしょ。」

なんとも頼りがいのある言葉か。

ナルトはヒナタの言葉に感涙している。  
さすがは両想い・・

「アンコ」は背後にいる何かに気付き、左手にクナイを構える。

「クナイ……お返しますわ……」

「わざわざありがと。」

アンコの背後に立っていたのは笠をさした髪の長い草隠れの下忍だつた。

サスケはその下忍を見て、目を細める。

「サスケ？」

「大蛇丸だ。」

「……ビニに？」

「あの笠をさした草隠れの下忍だ。髪の長い。」

「……あいつが。でも、なんでわかつたんだ？」

「資料にのつていた。あの長い舌、それにこのチャクラ量間違いない。」

「変化……じゃないね。何かの術かな？でも、なんでここに本人が。」

「

「めぼしい者につづつけといつてとこだろ。」

「どうする？殺るか。」

「・・・何もしない。旧家ならともかく名家なら放置だ。」

「「分かった。」」

サスケ達三人は大蛇丸を注意しながら見つめる。

大蛇丸はクナイを返してアンコとトモルから離れる。

「どうやら今回は血の氣の多い奴が集まつたみたいね。フフ・・・。楽しみだわ。」

今どきのアンコが一番血の氣が多いが、気にしないよう。

「それじゃ、第一の試験を始める前にアンタらにこれを配つておくな！」

アンコの右手に持つ物を見せる。  
それは同意書の紙の束だ。

「同意書よ。これにサインをしてもらいつわ。」

「・・・何をだ？」

「うから先は死人も出るから、それについて同意をとつとかないとねー私の責任になつちやうからやーーー。(ハート)」

笑いながらそんなことを言つ。

笑いながら言つことではないのだが、忍だからなのか分からぬ。

「まず、第一の試験の説明をするからその説明書にこれにサインして、班」とに後ろの小屋に行つて提出してね。」

同意書を各下忍に配りせん。

「じゃ！第一の試験の説明を始めるわ。早い話、ここでは極限のサバイバルに挑んでもらうわ。」

「サバイバルですか。どんな内容かな？」

「半分以下にするとか言つていたからな。」

「殺し合ひだつたら楽だな。」

サスケ達三人は物騒なことを考える。

「まず、この演習場の地形から順を追つて説明するわ。この第四四演習場は、力ギのかかるた44個のゲート入口に円状に囲まれてて川と森・・中央には塔がある。その塔からゲートまでは約十km。この限られた地域内であるサバイバルプログラムをこなしてもらう。その内容は・・・各々の武具や忍術を駆使した。」

誰もが固唾を飲む。

「なんでもアリアアリの巻物争奪戦よーーー」

巻物争奪戦・・・それはどんな内容か。

「天の書と地の書、この二つの巻物をめぐつて闘う。ここには81人、つまり27チームが存在する。その半分13チームには天の書、もう半分の14チームには地の書をそれぞれ1チームひと巻ずつ渡す。そしてこの試験合格条件は・・・天地両方の書を持って中央の塔まで三人で来ること。」

つまり、巻物を取られた14チームは確実に落ひるのだ。

「ただし、時間内にね。」この第一試験、期限は120時間。ちゅうど5日間でやるわ！」

「五日間……？」

「「」はんぱじーすんのオー？」

「自給自足よ！森は野生の宝庫。ただし人喰い猛獸や毒虫、毒草には気をつけて。」

「ショウジは「」はんが食えなくてショックを受けうなだれる。つうか、サバイバルに「」はんが届けられるわけはない。ど！」のお坊ちやまか。」

「それに13チーム39人が合格なんてまずありえないから。なんせ行動距離は日を追うごとに長くなり、回復に充てる時間は逆に短くなつてゆく。おまけに辺りは敵だらけ。うかつに寝る事もままならない。つまり、巻物争奪で負傷する者だけじゃなく・・・コースプログラムの厳しさに耐えきれず死ぬ者も必ず出る。」

ほとんどの試験の厳しさに緊張する。

「早く合格すればいいだけの話だな。」

「なんつつか、簡単だな。」

「楽ができるんですね。演技もしなくてすみそりですしそうして監視の田も

ないから素の自分をさらけだせますね。」

サスケ達はそんな空氣の中場違いな言葉を小さな声で囁つ。

「続いて、失格条件について話すわよ！まず一つ目、時間以内に天地の巻物を塔まで三人で持つてこれなかつたチーム。二つ目、班員を失つたチーム。又は再起不能者を出したチーム。ルールとして、途中のギブアップは一切無し。五日間は森の中！そしてもう一つ、巻物の中身は塔の中にたどり着くまで決して見ぬこと！」

「途中で見たら、ビーなるのぉ？」

「それは見た奴のお楽しみ」

中忍になれば極秘秘文書などを扱うこともある。信頼性を見る為だ。

もし途中で見たりすれば、それは依頼主の信頼を失うと同義だ。

「だいたい試験中なんだ。絶対罷だろ。」

「説明は以上。同意書三枚と巻物を交換するから・・その後、ゲート入口を決めて一斉スタートよ。最後にアドバイスを一言・・死ぬな！」

アンコの一言にみんなに緊張が走る。

そして、巻物と交換の時間がきた。

次々に小屋に下忍達が入り、巻物を交換する。

そして、各ゲートに移動し待機・・スタートの合図を待つ。

### キバ・ハナビ・シノチーム

「ひやつほおおー！ サバイバルならオレ達のオハコだー！ ハナビ、ビビるなよー！」

「そつちこそー！ 勝手な行動を取らないでくださいね。」

キバとハナビは言い合いをし、シノは無言である。

### シカマル・チョウジ・いのチーム

「命がけかよ。めんべくせーがやるしかねーなー。（こいつなつたらトモル狙いだ）」

「ブツブツ・・・

シカマルは弱い奴を狙う（氣マンマン）でチョウジはんが食べなくてブツブツ言つてる。

いのはそんな二人を見て不安になる。

### トモル・ゴラム・サクラチーム

（よーーしいー！ 負けねえー！ ！ 近付く奴は片つ端からぶつ倒してやるうーー）

トモルは他の下忍を挑発する行為をし、コラムとサクラはそんなトモルを見てイラつく。

### 音忍三人組

（フフ、やつとこの機会が来た。公然と我々の使命が果たせるチャンスが・・・）

彼等はいったいなんの使命があるのか？

### カブトチーム

カブトのメガネがキラリと光る。  
その目はなにを見ているのか？

### 我愛羅・カシクロウ・テマリチーム

（敵チームもそうだが、我愛羅と五田間もいるのが怖い）

カンクロウとテマリは同じチームの我愛羅に怯える。

### 謎の草忍三人衆（大蛇丸チーム）

「まずはルーキー狙いですね。」

「「」から殺してもいいそだからかえつて簡単だわ。」

草忍の一人に変装した大蛇丸が舌なめずりする。はたして奴の目的は？

ネジ・リー・テンテンチーム

（ガイ先生、ボクはガンバります！）

リーは気合いを充分にし、ネジは無言でテンテンは武具を手入れする。

サスケ・ナルト・ヒナタチーム

「どうする？」

「とりあえず、巻物を揃えてからだな。それと・・・」

「・・・了解！」

サスケ達は余裕といった感じで待つ。そして、時間がきた。

「これより、中忍選抜第一試験！開始！！」

合図が鳴り、扉が開き全ての下忍が一斉に駆け出す。

「あの三人ですね！－！」

「ガキどもを探せ！」

大蛇丸達はあるチームを探す。

第二試験が始まつた。

はたしてどうなるのやら！

## 第一の試験（後書き）

第一試験が始まった。

サスケ達三人はどんな行動を・・・

次回、動く者達・・・

## 死の森の行動（前書き）

第一試験が始まつた。  
サスケ達はどんな動きをするのか。

## 死の森の行動

始まつて早30分が経つた。

サスケ達三人は森の中を駆ける。

「・・見つけた。」

「よし。」

サスケ達は近くの木の枝に着地する。  
サスケ達の正面の先、約十㍍くらいのところに一つのチームが駆けていた。

「あれだな。」

「さつさと殺つちまうか。」

「うん。」

三人はクナイを構え、敵目掛けて投げる。  
クナイは敵の頭におもいつきり刺さり脳まで刺さる。  
敵は木の枝からずり落ち、地面に激突し絶命する。  
サスケ達は敵に近寄りポーチを探る。

「あつた。地の書よ。」

「これで揃つたな。ヒナタのおかげだぜ。」

「ああ、ヒナタの白眼のおかげであつたり揃つたんだからな。」

始まつた直後、ヒナタは白眼を使い地の書を持つチームを見つけたのだ。

「さて、これからどうする？他のチームの巻物でも奪うか？そつすれば合格チームも少なくなるしな。それとも早くゴールするか？」

「いや、ゴール近くでぎりぎりまでこの森で待つ。奪う必要もない。襲つてきたなら話は別だがな。早くゴールするのはまだいいだろ。せつかくの自由なんだ。のんびりしようじやないか。」

「わかつたわ。」

「なら、移動するか。ゆつくりな。」

方針が決まり、サスケ達はゴール付近に移動を開始した。

「とりあえず、寝床を確保だな。久し振りだからな。この森で過ぐすのは。」

「確かだ。」

「とりあえず、私とナルト君は一緒にサスケ君は離れた場所でね。」

「おい。それはさすがに酷いぞ。」

「サスケ君なら一人でも大丈夫じゃない。それとも何？私とナルト君の励みを見たいの？」

「そういうやここんどころシてなかつたな。じついう野外も悪くないな。」

「はあ・・・わかつたわかつた。好きにしてくれ。俺は離れた場所で寝るから。」

なんていうかのんびりとした会話である。  
ここは死の森なのに、敵がたくさんいるのにこれはさすがにないで  
あろう。

しかし、彼等だからの会話である。

それよりナルトとヒナタの会話の内容は卑猥である。  
二人の関係を考えれば仕方ないが。

「・・・」

「サスケ君。」

「気付いたか。」

「ああ、ていうか気持ち悪すぎ。見てるのは。」

「大蛇丸だな。」

サスケ達は離れた後方から粘つこい視線に勘づいた。  
視線の正体は大蛇丸だ。

本体ではなく、分身体のほうだろ。

「どうする？殺つちまうか。」

「・・・いや、田つけられるのは嫌だからな。放置してもうゴールしよう。」

「いいの？」

「気付かないようにすれば奴は俺達を狙わないだろう。」

「じゃ、ゴールするか。」

サスケ達は大蛇丸の存在を無視して開始から一時間二十分頃にゴルし第一試験を突破した。

「私の存在に気付かないなんてどうやら見込み違いね。イタチの弟にしてはあんまり才能が無いわね。これならコラムって子のほうが才能があるわね。いるないわね。」

サスケの思惑通り、大蛇丸はサスケを付け狙うことなくなった。

時間を巻き戻し、第一試験開始して約五十分後、キバチームは巻物を揃え塔に向かってる時、キバは何かに気付きハナビに確認してもらひ。

ハナビの目に映ったのは六人の忍だ。

キバは見に行くといい、ハナビとシノは仕方なくキバの後を追う。

キバチームは近くの茂みに隠れる。

隠れた時、赤丸がブルブルと震えだした。

キバチームは茂みから様子を見る。

一つは我愛羅のチーム、もう一つは雨隠れのチームだ。  
雨隠れのチームは我愛羅のチームを見下すが、我愛羅が相手を挑発する。

カンクロウが我愛羅に助言するが無視して物騒な言葉を言つ。  
それを聞き、雨隠れのチームのリーダーが怒り術を発動する。  
傘を三つ上空に投げ仕込み千本をコントロールする。

仕込み千本を我愛羅に向かつて放つ。

土煙が我愛羅を包む。

雨隠れのリーダーは殺つたと笑みを浮かべるが煙が晴れるとそこには、砂で守られた無傷の我愛羅の姿が見えた。

雨隠れのリーダーは驚愕する。

カンクロウは我愛羅の砂の盾という術の効力と性能を説明する。  
普通はそんなことは喋らない。

雨隠れのリーダーは自身の術をあつさり防がれて驚愕する。  
カンクロウの挑発の言葉に雨隠れのリーダーは突つ込んでくる。

「砂漠柩！」

我愛羅は印を結び、瓢箪から出た砂をコントロールし、相手の動きを捕らえる。

相手は砂に埋もれ捕えられ動けなくなつた。

我愛羅は一本の傘を右手で持ち差して左手をゆっくり上へと動かす。  
左手の動きと連動して相手も宙に浮かんでいく。

途中で止まり、我愛羅は相手を見る。

相手は我愛羅を見て、恐怖で顔を歪める。

「砂漠葬送！！」

左手を握ると相手は砂の圧迫で声を出すまもなく絶命した。  
それと同時に血渦きが全体に飛び散り相手一人にも降り注ぐ。  
正に血の雨だ。

それを見て相手二人とキバチームは恐怖する。

相手一人は巻物を差し出し見逃してもらおうとするが、我愛羅は無視して相手一人に砂漠柩を放つ。

相手一人はなんとか逃れようと動くが砂に包まれ、結局は最初に殺された相手と同じ運命にあった。

キバチームは逃げようとするが、足がくすんでゆっくりでしか動けなかつた。

我愛羅は見逃さずキバチームも襲おうとするが、カシクロウとテマリによつて襲おうのを止める。

我愛羅はキバチームを見逃し塔に向かう。

カシクロウとテマリも我愛羅の後を追う。

「・・・アレが一尾の人柱力か。どうみる？」

「どうみても制御ができるねえ。一尾と人柱力が不安定で情緒不安だ。」

「忌み嫌われるからなんでしょうね。私達のように人柱力とか関係無しの仲間がいませんね。だから孤独になりやすい。」

少し離れた大木の枝に分身体のサスケ達が我愛羅の印象を言つ。  
なんで分身体がいるのかというと、開始と同時に影分身をし護衛対象を監視していたからだ。

「それにしても、運がよかつたなキバとシノは。俺達もだけど。」

「もし」のまま攻撃をしていたら私達が介入するはめになりましたからね。ハナビはどうでもいいけど。」

「それより見ろよハナビの奴、なんか悔しそうな顔をしてやがるぜ。」

「

「本当。なんでだ?」

「幼くても日向の人間。自分がなにもできなかつたことと、アレを見て恐怖して足がくすんでたからじゃないかしら。無駄にプライドが高いからね。」

さすがは元日向家、ヒナタの考えは当たつている。ハナビは自分が怯えていたのが腹ただしかつた。

日向家次期当主が、木の葉最強の名門が恐怖したなんて屈辱だからだ。

だからこそ、自分が悔しくて堪らなかつたようだ。

「は、無駄でバカなプライドだな。早死にするタイプだな。」

「どうせ死ぬわよ。ああいう身の程知らずの愚図は。」

「・・・とつあえず、護衛は完了だな。」

サスケがそう言つと分身体三人は煙となり消えた。

開始して次の日、今トモルチームは窮地に立っている。

初日に彼等は草隠れの忍に成り済ました大蛇丸と遭遇し、トモルは氣絶、ユラムは呪印をつけられ倒れていった。

無傷のサクラは一人を守るため一睡もせず見張りをしていた。

そして一日が過ぎそこに音隠れの忍が現れる。

さらにサクラと音隠れの間にリーがサクラを守るように立ちふさがる。

リーは善戦したが音隠れの奇抜な術に苦戦を強いられる。

サクラも戦うが大したことができなくやられる。

そこにシカマルチームがサクラを助けるために動く。

シカマルチームは連携攻撃で優位に立ち、仲間を人質にして立ち去るよう言うが音忍は人質ごと攻撃をし、不利になる。

さらにネジとテンテンも現れ、更なる戦いは熾烈になるかと思われた。

「サクラ、誰だ・・・お前をそんなにした奴は、どいつだ。」

その時、コラムが目を覚ました。

ただ、体半分が呪印に取り巻いている。

ユラムは圧倒的強さで音忍の一人を負傷させ、さらに両腕を折る。

その後、もう一人も襲おうとするがサクラによつて阻止され呪印も引いていく。

一応無傷の音忍は巻物を引く手打ち料として渡し立ち去る。

数分後、トモルも目を覚まし行動ができるようになった。

ネジはユラムをジッと見つめていた。

「ふう、一回でこれとは先が思いやられるな。」

「しょうがねえよ。あいつらが勝手に首を突っ込むからだぜ。」

「ま、無事でよかったです。」

少し離れたところに分身体のサスケ達が見ていた。

「それにしてもあのコラムの奴、アレは呪印だな。大蛇丸に襲われたか。」

「むしろ好都合だ。完全に俺を付けねらわれることはなくなつた。助かるぜ。」

「ネジは本当に日向家のエリートかしら。私達に気付かないなんて。」

「コラムが大蛇丸に気に入られてサスケ達は狙われなくなつたため喜ぶ。」

ヒナタは日向家は落ちぶれたと思つ。

「あんな奴に気にするなよヒナタ。」

「嫉妬？嬉しいわ。安心して私はナルト君一筋だから。」

「それよりも、あのままだとまだ危険だからこのまま護衛をするぞ。」

「

「わかつた。」

サスケ達はこの場から去ったシカマルチームの後をこつそりと追つ。

五日が経過して、第一試験が終了した。  
合格数は8チーム、24名。

## 死の森の行動（後書き）

第一試験を突破した8チーム。

次は第三の試験・・・試験内容は？

次回、第三試験・・・

## 品掛工の試験予選（前書き）

第三試験が始まる。  
・・が、その前に。

「まずは第一の試験、通過おめでとう……」

（「フ・・・第一試験受験者数81名、111名で24名も残るなんてね。半分以下にするとは言つたけど、本当は一ヶタを考えてたのに）

第三の試験会場は死の森の中央の塔内にある。

そこには第一試験合格者24名と火影と推薦した班の担当上忍、さらに試験官と中忍数名がいる。

火影から見て左から音忍チーム、我愛羅チーム、カブトチーム、ネジチーム、トモルチーム、キバチーム、いのチーム、サスケチームと並んで立っていた。

いのチーム

（バクバク・・・）

（まだこんなに残つてんのかよ。クソめんどくせーー）

（「ハムぐるたちも合格してたー（ハート））

チョウジは食べられなかつた菓子をぱりぱり食べていて、シカマルは合格数を見てめんどくさそうにし、いのはコラムが合格していて

喜んでいる。

### ネジチーム

（へー、あれがガイ先生の永遠のライバルね。ビジュアル的にはガイ先生、カンペキ負けだけど）

（やはり先生方の中でガイ先生が一番ナウいです！光ってます！よお～～～し！見てて下さいガイ先生！ボクも光ってみせます！…）

（やはりめぼしいところがそろつたな。うちはコラムか。）

テンテンはガイとカカシの関係を見て、リーはガイを見て燃えており、ネジはコラムを見る。

### 音忍チーム

（・・・）

（腕のお返しはしてやるぜ。うちちはコラム。）

音忍男子二人はコラムを睨む。

### カブトチーム

「・・・」

カブトは音忍の担当上忍の目に気付く。  
はたして、なにを考えているのか？

### 我愛羅チーム

(27チーム中、たつた8チームしか残らないとはな)

カンクロウとテマリはまだ8チームも残つてたことにめんどくさい  
うに思う。

なお、我愛羅はただ一人傷一つ無く服に汚れもない。

### キバチーム

(砂の奴等・・・)

「クウーン。」

(こんなにいふとは、そして・・・日向ネジ兄様)

キバは我愛羅を見て恐れており、赤丸も縮こまつている。  
ハナビは上から目線で残つたチームを特にネジを見る。

### トモルチーム

(何よ、木の葉のルーキーみんないるじゃない)

(なんかさあ！なんかさあ！火影様にイルカ先生にカカシ先生に激  
眉までいるう！みんな勢揃いって感じだなあ！)

(フツ・・・あんまりいい予感はしねーな)

サクラは木の葉のルーキーがみんな合格したことに驚き、トモルはカカシやイルカなどがいるため感激し、コラムは呪印が痛むらしく首を押さえる。

### サスケチーム

(大蛇丸がいるな。音忍の担当上忍に化けてるな。つうか火影気付けよ。まあ俺に向いてないからどうでもいいな)

(ふわ〜つ、眠い。昨日は激しくやりすぎた。まだ眠い)

(は〜、腰が少し痛い。今日が第三試験だというのを忘れてたわ。でも、気持ち良かつた／＼／＼)

サスケは大蛇丸に気付いたが放置し、ナルトとヒナタは昨日激しくやつてたため少し疲れのようだ。

(これほど残るとはのオ。しかも残った者のほとんどが新人。あやつらが競つて推薦するわけじゃ。それに・・ナルト達もあるようじやしのオ。)

火影は新人の担当上忍を見て、次にサスケチームを見た。

「それではこれから、火影様より第三の試験の説明があるー各自、心して聞くようにーー！」

火影は試験の真の目的を言つ。

簡単に言えば戦争の縮図、第三の試験からは各国の大名や著名な人物、忍頭などが招待され中忍になりそうな下忍の実力を見せる。忍達の力を見せつけ強国だといろんな人に知らしめなきやならない。そうでなければ依頼はこないのだ。

他にもいろいろあるが、そう言つことだ。

そのためにも、忍達は命掛けの戦いを見せなきやならない。何故命掛けなのか？それは己の夢や里の威儀や威信を半端な気持ちでやる者などいないのだと言わすためだ。

まあ、サスケチームにとつては火影の会話など全く興味がないわけだ。

サスケチームはすでに火影クラスかそれ以上の実力を持つている。それに己の夢はともかく里の為なんて彼等にはどうでもいい事なのだ。

「納得いつたぜえ。」

「何だつていい。それより早くその命掛けの試験つてヤツの内容を聞かせる。」

火影の話を聞き終え、我愛羅が第三の試験を早く始めるよう急かす。「フム・・・では、これより第三の試験の説明をしたい所なのじやが。実はのオ・・・ゴホン。」

「・・・恐れながら火影様。ここからは審判を仰せつかつたこの、月光ハヤテから。」

そこに一人の忍が火影の前に現れる。

「任せよ。」

「・・・皆さん初めてまして、ハヤテです。えー、皆さんは第三の試験の前に・・・「ホッ」「ホッ・・・やつてもらいたいことがあるんですね。ゴホッ！」

そこに現れたハヤテは顔色が悪く体調がよろしくない、そんな忍だ

「えー、それは本選の出場を懸けた、第三の試験予選です。」

「？予選！？？」

「予選って、どういってんだよ！？」

何故予選をやるのか、それは第一と第一の試験が甘かつたせいか少々人数が残り過ぎてしまったからだそうだ。  
そこで中忍試験規定にのつとり予選を行い、第三試験進出者を減らす必要があるようだ。

本選はたくさんのゲストが来るため、だらだらとした試合はできず時間も限られる。

そして、予選はこれからすぐやるようだ。

「これからすぐだと！？」

誰もが気合いをいれる中・・・

「あのー、ボクはやめときます。」

カブトが手を挙げ辞退する。

カブトの突然の辞退にトモルはなんとか聞く。

(辞退するといつことは情報収集は終わったってことか)

(音のスパイだもんな。当然か。それに実力は上忍クラスだな)

(力を押さえてるって感じですね。ま、私達に被害はさせんからどうでもいいですけどね)

サスケチームはカブトが辞退した理由を理解し気付いた。カブトはトモルに何故辞退するのかを嘘の理由で答える。カブトはチームの仲間と少し会話をして退出する。

その後、コラムの方でなにかあつたが数分で終わる。

「えーでは、これより予選を始めますね。これから予選は一対一の個人戦、つまり実戦型式の対戦とさせていただきます。一人抜けて23名となつたので合計11回戦を行い、えーその勝者が第三の試験に進出できますね。なお、一名は無条件で第三の試験に進出します。」

つまり、23人目は予選せずに第三試験進出ができるのだ。ルールはいたつてシンプルなタイマン戦、ただ勝負がはつきりした場合はハヤテが止めに入るようだ。

「そして、これから君たちの命運を握るのは・・・

「開け。」

「これですね。えー、この電光掲示板に・・・一回戦ごとに対戦者の名前を一名ずつ表示します。では、さっそくですが第一回戦の一発を発表しますね。」

全員が掲示板を見る。

最初に出る対戦者の名前は

・  
・  
・

命掛けの試験予選（後書き）

第三試験予選が始まった。  
まず最初の対戦カードは?  
次回、予選開始・・・

## つまらない戦い（前書き）

予選が始まった。  
さて、最初の対戦者は？

## つまらない戦い

最初の対戦カードが決まった。

『「つらはコラムVS赤胴ヨロイ』

呼ばれた一人以外は上方に移動する。  
誰もが注目する。

サスケチームとその担当上忍を除いて。  
試合が始まり、最初は互角の戦いをするが、ヨロイの右手がコラム  
の体の一部に触れるとコラムの力が急に抜けていく。  
実はこれはヨロイの異端の能力。

それは、相手のチャクラを吸い取る吸引術。

相手の体にあてがうだけでチャクラを吸い取ることができるのだ。  
しかし、せっかくの能力も吸収だけでは宝の持ち腐れである。  
ラウリ曰く吸収できるならそれを利用できないならせっかくの異端  
能力も無駄遣い・・・だそうだ。

コラムはなんとかヨロイから離れる。

だが、チャクラも残り少ないとどうするか思案する。

その時、トモルから応援がきてコラムはそつちに顔を向ける。  
そこにコラムはトモルの隣りにいるリーを見る。

リーを見てコラムは何かを閃いた。

ヨロイはどじめをさそりと突つ込む。

次の瞬間、コラムはヨロイを蹴りあげた。

その動きにリードガイは氣付く。

(アレはボクの……)

(何つ……?)

その技は影舞葉・・あいての背後にぴったりとくつついて追尾する  
補助術。

これにより形勢は逆転し、コラムの優位にたつた。  
その時、コラムの体に異変が起きた。

呪印が発動したのだ。

このまま中止になるかとおもつたらなんと呪印を押さえ付けた。  
これには上忍達と大蛇丸は驚く。

サスケチームとその担当上忍は押さえこんだコラムに驚くこともなくあんまり興味もなかつた。

コラムは影舞葉から連続の蹴撃を食らわす。

「獅子連弾……」

それが決まり勝者は・・

「第一回戦勝者についてはコラム・・予選通過です!」

コラムが勝つた。

それを見た下忍達はコラムの強さに興味などの感情を浮かべる。  
サスケチームはどうでもよかつた。

コラムは力カシに連れていかれ退出した。

おそらく、大蛇丸に付けられた呪印に封印術を施すためだろつ。

サスケとカカシが退出したあと、第一回戦の対戦者の発表がなされた。

### 『ザク・アブミバ油女シノ』

シノとザクが中央に立つ。

第一回戦が始まる。

それと同時に上忍に化けた大蛇丸が会場から去る。

ザクは左手でシノに攻撃するが、あっさり受け止める。

しかし、ザクはそこから術を放ちシノを吹き飛ばす。

シノはゆっくり起き上がり立ち上がる。

その時、ザクはシノの頬からなにかが出てきるのに気付く。

それは・・・虫！

なんと、皮膚を突き破つて体の中から虫がわいて出てきたのだ。

何故体の中から虫が出てくるのかというとシノの一族に関係がある。シノは旧家の者で秘伝の使い手なのだ。

体の中で虫を買わし虫を自在に操ることができるので。

ただし、その代償としてチャクラを虫に与え続けなきやならないが。ザクは後ろからなにかが蠢く音が聞こえ振り向くとかなりの数の虫がはい動いて近付いてきていた。

シノはギブアップを勧めるが、ザクは拒否し右腕も使いシノと虫の両方に術を放とうとする。

・・・が、放とうとした瞬間ザクの両腕が弾け右腕は千切れ飛ぶ。何故両腕が破裂したのか？それはシノがあらかじめに虫に指示をだし、ザクの術を使うために必要な俳空口に詰めらしたのだ。それが原因で両腕が破裂したのだ。

そして、とどめにシノはザクに近付き裏拳で殴り倒す。これで勝敗が決まった。

「勝者、油女シノ！！」

シノはゆっくり仲間のところに戻る。  
そのあと力カシが戻つてくる。

「なかなかやるな。油女一族は安泰だな。」

「あれだけ優秀なら、油女一族は恵まれどるな。」

サスケとラウリは意外とシノを高評価する。  
第三回戦の対戦者が発表される。

『ツルギ・ミスミ』VS『カシクロウ』

ミスミとカシクロウが中央に立つ。

第三回戦が始まる。

カシクロウは背負つてた物を横に置く。

それと同時にミスミは先手をとる。

カシクロウは先制攻撃を防ぐ。

すると、ミスミの体が軟体動物・・・まるで蛇のような感じになりカシクロウの体に纏り締め付け攻撃をする。

ミスミはカシクロウの首を締め付けながらギブアップを勧める。  
カシクロウは言わない。

そして、ゴキッと音がなりカシクロウの首がブランブラン揺れる。  
骨が折れたのだ。

「チイ、バカが・・・勢いあまつて殺しちまつたじゃねーか。」

「じゃあ今度はボクの番！」

なんと、首が折れて死んだカンクロウが動いた！  
よく見ると、顔の一部がボロボロ崩れていき中身が見える。  
衣服も破れ、違うものが出る。

「こ・・これは、傀儡人形！！」

傀儡人形・・忍具の一つでチャクラの糸を使って人形を操る。  
これを傀儡の術と呼ばれ傀儡にはあらゆるカラクリが仕込まれている。

背負っていた物の包帯が外れ中身が見える。

（！…あつちが本体だと！？）「…傀儡師！」

カンクロウは事前にカラクリとすり替えており、あたかも本体のよう振る舞っていたのだ。  
カンクロウは傀儡を使い、ミスマミの体を縫め付ける。  
思いつき縫め付けられミスマミの骨は砕けた。  
これで勝敗は決した。

「勝者カンクロウ！…」

次の対戦者が発表される。

『「うちはサスケ』VS『秋道チョウジ』



## つまらない戦い（後書き）

うちはサスケの戦い・・・実力を隠しながらの戦闘。

サスケはどんな戦いを？

次回、下忍うちはサスケの戦術・・・

## 隠す実力（前書き）

「うちはサスケ・・下忍としての戦いが始まる。  
はたして・・・

第四回戦、ついにサスケの出番がきた。

「俺か。」

「頑張つてね。」

「頑張れよ。」

「もし勝てるなら勝つておけ。」

「ああ。」

サスケとチョウジは中央に立つ。

「頑張れ～！～。」

「デブ～！～。」

いのとシカマルがチョウジを応援する。  
もつともいののは応援と言つていいものか。

「くつ・・・アイツり見てろー！」の試合をつとめ終わらせてギタキダ

夕にしてやる。」

当然、チョウジは怒る。

「まあやつ言わす、よろしくねチョウジ。」

「あ、うん。」

サスケは演技をし、心にもない言葉を言つ。

「それでは、第四回戦始めてください。」

試合開始の合図が言つ。

「忍法、倍化の術！！」

チョウジが秘伝の術で自分の体が倍化、いやさらには三倍に丸くなつた。

「肉弾戦車！！」

チョウジは巨大な丸いボールになつて体当たり攻撃をしてくる。

「おつとー。」

サスケは紙一重に躰す。

サスケはどつやつて倒さつか考える。

（下忍としての俺が使える術は豪火球と変わり身と分身、あとそれなりの体術と起爆札が数枚つてところか。写輪眼は使えない。つう

か、写輪眼を開眼しない事になつてゐるからな。この程度の攻撃なら下忍としての俺でも躲せるな。だったら時間をかけてチャクラを使わせきれかけたところを・・・

サスケは下忍での力でどうきり抜けるか考える。  
そして、ほんの数秒で作戦を決める。

「やるね！でも、ボクの攻撃は止まらないよ！

チョウジは連続で体当たりを仕掛ける。

だがサスケは全部ギリギリで躲すふりをする。

・・・試合が始まつて5分が経つた。

チョウジの体当たりが鈍くなつてくる。

「くうう！今度こそ食らえ！

チョウジが体当たりしてくる。

（今だ！）

サスケは起爆札付きクナイをチョウジが進行してくるであろう床に投げる。

床に刺さり、それに気付かないチョウジはそのまま突っ込んでくる。チョウジがクナイが刺さつてゐる床を通りうとする。

「喝！」

起爆札が作動し爆発する。  
床が飛び散りチョウジと吹き飛ばす。

「うわ～～！」

倍化の術が解け、元の体に戻り床に倒れる。  
チヨウジはなんとか起き上り、あらうと立ち上がる。

「もうひた！」

サスケはチョウジに接近する。

サスケは立ち上がった。手裏剣に殴りこける。

——ぐわー！

「おりやああー！」

サスケはそこから連續攻撃でチヨウジを追い詰める。チヨウジは防御もできずモロに食らいまくる。

「だだだだ！」

「...」  
「...」

チョウジのお腹にサスケは連續パンチを食らわす。チョウジはお腹を押さえ苦しみながら後退りする。

「これで・・・終わりだ！！」

サスケはジャンプからの右跳び回り蹴りを食らわした。

「ぐああつ！」

チョウジは顔面をモロに食らい吹き飛びそのまま仰向けに倒れた。  
チョウジは動けなくなつた。  
うわ言に肉へつと皿つてこる。

「勝者、うちはサスケ！」

勝利宣言をもらひ、サスケは軽く息をはき、ゆっくうナルト達のと  
ころに戻る。

さて、サスケの戦いを見た忍達の感想を聞いてみよう。

トモルチーム

「チョウジに勝つたあー！やるなあー！」

「なによー。コラム君のまつがずっと強いわよー。」

「・・・」

（あれがあのイタチの弟か。はつきりいつてコラムにはかなりある。  
それに写輪眼も開眼してなもそつだ。期待はできないな）

キバチーム

「ケツー！全然大した事ねえな！」

「ひんなものですか。うちはも落ちたものですね。」

（コラムとは差があるわね。悪いけどうちのチームが誰が相手でも  
勝てるわ）

## シカマルチーム

「負けちまつたか。」

「あ～んも～、残念。」

「まあ・・負けたけど焼き肉べりいは連れてつてやるか。」

## ガイ班

「「コラム君よりは強くないですね。才能はあるの!」」

「仕方ないセリー!これも青春だ!」

「ふん!話にもならん。お家の娘が泣く。」

「うーん、やつやのコラムって子のほうが強そうだったわね。」

## 音忍

「・・・どうでもいいですね。」

「なんか、標的より弱いね。」

「本当にあいつらはか？なんかたいしたことないじゃん。」

「さつきの奴が強かつたってだけだろ。」

「フン・・・」

火影達

「あんな腕じゃ、大蛇丸が狙う理由がないね。」

「実力は下忍でも真ん中くらいだな。まだ中忍になるには早いな。」

（ほつほつほつ・・さすがはつらはサスケじゃな。上手く手加減しどるのオ。他の奴等はそれに気付いとらん。）

サスケチーム

「さすがはサスケ。上手い。」

「よかつたですね。相手が倒せるレベルで。」

「相手のチャクラを減らして勝てる優位に立つ。さすがだな。そのおかげで下忍として誤魔化せましたな。」

サスケはナルト達と合流する。

「お疲れ様。」

「予選突破おめでとうございます。」

「どうも。」

さて、次の対戦者が発表された。

『春野サクラ』 VS 『山中一の』

勝負の結果は引き分け。

はつきり言つてしまえばかなりつまらない戦いだった。  
下忍の下同士の戦いだった。

サクラはともかく、いのは元々戦闘向きのやうの一だ。  
どちらかといえば情報収集向けの忍なのだ。  
さて、次の対戦者の発表。

『テンテン』 VS 『テマリ』

勝者はテマリ。

これは相性の問題だ。

テンテンは忍具を使つた戦術が得意、対してテマリは巨大な扇子を使つた風遁術が得意。

どれだけ手裏剣やクナイを投げても、テマリの風遁術の前では無力であり逆に返り討ちにあつたのだ。  
さて、次の対戦者は？

『キン・ツチ』VS『奈良シカマル』

勝者はシカマル。

最初はキンが優位だったがシカマルの得意忍術、影真似の術で捕らえさらに戦略で勝利した。

「やるなシカマル。奈良家は頭がいいのが多いな。奈良家はそういう遺伝なのか?」

「奈良家なら有利得るだろ?。この年でその頭脳とは将来が楽しみだな。」

さて、次の対戦者・・8回戦は?

『波巻ヒナ』VS『日向ハナビ』

## 隠す実力（後書き）

ヒナタの対戦相手は・・・日向ハナビ。  
ナルトの対戦相手は?  
次回、愚かな日向兄妹  
・・・

自惚れの日向兄妹（前書き）

ヒナタとハナビ、勝負の行方は?  
そして、ナルトの対戦相手は?

「まさか、次期当主ととはな。」

「じつある？殺しちまうか？」

「だめよ。殺つたら私達の存在がバレるわ。」

「確かに・・・なら、じつしますか？」

「わざと負けるわ。私に任せで。」

ヒナタはサスケ達と会話し、中央に立つ。  
ハナビと対峙する。

「始める前に言つておきます。あなたに私は勝てません。棄権しな  
れい。」

「・・・残念ですが、そつ簡単に負けるわけにはいきません。」

「さうですか。わかりました。どうなつても知りませんよー・白眼ー  
！」

ハナビが白眼を発動する。

そして、ハナビは日向の構えをとる。  
ヒナタは普通の構えをとる。

「それでは、始めてください！」

ヒナタは手裏剣を投げ牽制する。

ハナビは軽く躱す。

投げた直後、ヒナタは接近戦を仕掛ける。

「やあああ！」

ヒナタは拳や蹴りをしてくるが、ハナビは躱しいなして防ぐ。  
そのままハナビカウンター攻撃の一撃をしてくる。

「ハアツ！！」

「グツ！」

ヒナタは紙一重で躱すが、体に掠り腹を押さえる。  
何故掠つただけなのにヒナタは腹を押さえるのかといふと、それは日向家特有の体術にあるからだ。

日向家は体内を攻撃する体術、通称柔拳を使う。

外見は頑丈にできる忍でも、内面を攻撃されればただではすまない。

さらに、白眼でさらに有効だが打てる。  
日向家が強いのはこれのおかげなのだ。

ただし、ヒナタは別格だがそれを知るものはサスケチームと火影、ダンゾウとイタチだけだ。

「・・・さすがは名家の忍ですね。強い・・・」

「私は日向家次期当主です。最強なのです。私に負けるのを誇りに思いなさい。続けますよ。」

ハナビは構える。

しかし、ヒナタは構えない。

「どうしました？何故構えないのでですか？バカにしてるのですか？」

「いえ・・・審判。」この試合、私の負けです。ギブアップします。」

ヒナタはギブアップを宣言した。

「「ゴホッ・・・わかりました。よろしいのですね？」

「はい。」

「わかりました。・・・勝者、日向ハナビ！」

ヒナタとハナビはチームの元に戻る。

「お疲れ様。」

「仕方ないな。」

「ハナビという小娘は自意識過剰のようだな。勝った氣でいるとほ  
井の中の蛙だな。ま、所詮そんなんものか。」

サスケチームはヒナタを労う。

「それにも攻撃が掠つた時、ヒナタはチャクラの膜を貼つたのに全然気付かなかつたのか？はつきりいつダメージはほぼりだぜ。」

「白眼があるのに気付かんつて飾りなのか？さすがは日向家次期当主（笑）だな。」

「日向ネジも気付かなかつたな。日向家下忍がこれでは、将来はお終いだな。」

実は、ヒナタは掠る直前にチャクラの膜でガードしたのだ。

「日向家なんて所詮そんなもんよ。自惚れの強い名家だからね。」

その間に次の対戦者の発表がされる。

『遠野トモル』 VS 『犬塚キバ』

二人は中央に立つ。  
試合が開始する。

キバは獣じみた体術と赤丸との連携でトモルを苦しめる。  
対するトモルは影分身と変わり身を使った戦術でキバを翻弄する。  
勝負の結果はトモルの勝ちだ。  
トモルの奇策でなんとか勝てた。

次の試合は？

『日向ネジ』 VS 『渦風ナル』

ネジは中央に降りよつとするが、その前にナルトがありえない言葉を言つ。

「審判・・・俺は棄権する。」

『『『『えー?』』』

「なに!?

なんと、ナルトは棄権すると言つた。  
誰もが何故?と疑問をいだく。

「棄権・・・ですか。いいのですか?」

「構わない。俺は棄権する。」

「・・・わかりました。渦風ナルが棄権した事により日向ネジ、不戦勝で予選通過です。」

なんともあじけがなくあつさりと終わつた。  
他の下忍達はナルトの棄権に怒る。  
何故戦わないのかと。

「どういう事だ。何故戦わない。何故棄権した。」

「・・・俺じやアンタに勝てねえよ。だから棄権した。ただそれだけだ。」

「ふん・・・懸命な判断だ。貴様！」とせでは日向家に勝つ事は不可能だ。」

ネジはナルトが何故棄権したのか聞き、ナルトは当たり障りのない解答を語る。

ネジは納得してナルトを見下す。

「バカじやねえか。白眼はやはり飾りだな。」

「これが私が元いた日向家・・・抜けてよかつた。」

「哀れを通りこして空しいな。」

サスケチームはネジを小馬鹿にした。

さて次の試合・・・最後の試合の対戦者のカードは?

『ロック・リー』 VS 『我愛羅』

予選最後の試合。

努力の天才対一尾の人柱力、はたして・・・

次回、予選終了・・・

予選最後の試合。  
はたして・・・

掲示板に載つたリーと我愛羅は中央に立ち、対峙する。

リーは体術の天才。

努力家でかなりの実力者。

対して我愛羅は一尾を宿した人柱力。

砂を使った防御を得意とし自在に操り翻弄する。

「どっちが勝つかな？」

「我愛羅だな。一尾の人柱力だしあの砂は厄介だな。」

「問題はリーがどれだけあの我愛羅に食いついていいかだね。」

「あのガイのもとで修行しているのです。おそらく体術の禁術を使えると考えたほうがいいでしょう。」

サスケチームはどんな試合になるか、特に我愛羅の実力に興味を持つた。

「それでは・・始めてください！」

開始の合図がされたと同時にリーが駆ける。

そのままリーは我愛羅に蹴りをいれるが、砂の盾によりあっさり防

がれる。

我愛羅が砂を操ることにサスケチームと我愛羅チーム以外は驚く。リーは我愛羅に連續攻撃を仕掛けたが全て、砂の盾に防がれる。時々、砂が迎撃するがリーは躲す。

「なかなか厄介な盾だな。オートな分余計にな。」

「だが、リーに忍術や幻術が使えないのは厳しいな。」

「仕方ないわ。彼にはその才能が無いのよ。」

「俺が調べた所、リーはアカデミー時代は全くノーセンスだったようだ。それから体術がここまで伸びたのは一種の才能だろう。」

「そう・・実はリーは体術しかできないのだ。忍術や幻術の才能が全くなし。」

「その為残された道は体術しかなかつたのだ。」

「だが、それだけで決めるのはマヌケな奴等のみだ。」

「ああ、体術は体の資本だ。体術捌きの有無で勝敗が決まるようなものだ。忍術や幻術だけを極めた奴は体術がからつきしで体力もない。だからチャクラ切れが早い。」

「スタミナが多ければ術を多く使いこなせるし威力も倍増する。」

「体術の最大の利点は印を組まない事だ。印を組む必要もない上に単純な体捌きがものをゆう。それに・・あのリーという少年、まだなにかあるようだしな。」

リーは印を組んだ石像に飛び乗る。

「リー！外せ————！」

「！で、でもガイ先生！それは……大切な人を複数名守る場合の時じやなればダメだつて！」

「構わーーん！！オレが許す！！！」

ガイの許可を聞き、リーは笑う。  
リーは足にある物を外す。

それは・・・

「重りか。」

「古典的な修行法だな。問題は・・・」

「あの重りがどれくらいなのかだね。」

「ガイだからな。ヘタをすればかなりの重量かもしけないな。それだと、勝負は分からないな。」

リーは両足の重りを外してそれを床に落とす。

落ちた重りは床を陥没させひび割れが起こり凄い音が聞こえた。  
そのあまりの重さにガイ以外は驚く。

「すげえなーあの重り、なんつう重量だよ！

「床がめり込むなんて。凄いですけどやつすぎでしょ。」

「さすがはガイ・・・我らの予想を上回つていましたね。」

「・・・俺達もいついう修行をしたほうがいいのかな?」

「それは呪文。」

サスケチームもリーのつけてた重りに驚く。

せ次第に自分達も重りを作り、さがと謂ふが二郎山と比ぶるに甚する。

「行け――！！リ――！！！」

「オーラス！？！」

ガイの雄叫びにリーが答えるとリーは一瞬で消えた。

次の瞬間、リリは我愛羅の背後に移動していく。

そしてそのまま殴りうつするが寸前で砂の盾が防がれる。

そのすぐにまた高速で移動しました背後から攻撃するがまた砂の盾で防がれる。

۱۸۰

だが、それ以上にリーの速さに驚く。

さすがの我愛羅も直立不動のまゝとはいがむをキョロキョロします。

そして、ついにリーが砂の盾を潜り抜け我愛羅の頬に傷を付けた。  
我愛羅にリーのかかと落としが決まつたのだ。

特に砂チームは驚愕といった感じの表情で見た。

「青春は――――。まつくなつだ――――。」

ガイの雄叫びにリーはますますスピードをまして突っ込む。我愛羅は砂で抵抗するがリーの速さにつけられずぼぼなにもできない状態だ。

リーが攻撃するがやはり砂の盾に防がれる。ただし徐々に砂の盾が追いつかなくなる。

「うわあですなー。」

そしてついにリーの拳が砂の盾を抜け、我愛羅の顔面にヒットした。

「速いな。下忍のいや、中忍のスピードじゃないな。おそらく上忍並のスピードだ。これなら砂の盾も追いつかないな。」

我愛羅はゆっくり起き上がり、顔を上げる。

するとなにかが崩れる音が聞こえる。

見ると我愛羅の顔がボロボロ崩れる・・いや、顔ではなく砂であった。

我愛羅は砂をまといリーの攻撃を防御していたのだ。

我愛羅の表情は笑っていた。

まるで、獲物を見つけた肉食動物のようなそんな表情を。

「砂をまとつてたおかげで無傷か。便利だな。」

「まるで鎧のようだな。まわり砂の鎧だな。」

「一段がまえの防御ですか。厄介ですね。しかし、鎧を開いた時チャクラをかなり消費してゐるようだ。」

「それに、鎧とはいえあの防御力は低いようだ。それに砂を体に密着させるという事は体が重くなり体力も使うという事になるな。」

サスケチームはすぐに我愛羅の砂の鎧の能力と弱点に気がつく。リーは腕にある包帯をほどき技を出す構えを取る。

リーは我愛羅の周りを高速で走り回る。

そして、一瞬で我愛羅の懷に入り顎を蹴り上げる。しかし、砂をおかげか簡単に上がらない。

そこでリーは連續蹴りで上がるさせる。

そして、包帯で我愛羅を巻き身動きできなくし。

「表蓮華！――！」

リーの表蓮華が決まる。

誰もがやつたと思つ。

だが、リーは我愛羅を見る。

見ると我愛羅の顔はボロボロと崩れていた。

「身代わりだな。リーが連續蹴りをしている最中、一瞬だが痛みで目を瞑つた。その時だな。」

「その一瞬を見逃さなかつた我愛羅も大したものだな。」

「運がよかつたわね。もし直撃だつたらかなりのダメージになつたわ。」

「これで、リーの動きは悪くなつたな。我愛羅の有利だな。だが、あの一尾の人柱力は情調不安定だからな。何しでかすかわからん。」

サスケチームはリーの攻撃が何故外れたのか瞬時に分かった。

ラウリの言葉通り、我愛羅の攻撃はジワジワとなぶり殺すようなやり方だ。

リーはなぶりられ続ける。

しかし、何撃目の攻撃を食らひ才前リーの動きが変わった・・いや、元に戻った。

「リーの動きが戻った? どういう事だ? · · · あれか。」

「まさか · · · 下忍である禁術を使えるといつのかー?」

「へ? ラウリ、どういふことだ? 説明しろー。」

「 · · · リーは、裏蓮華をする氣だ。」

「裏蓮華? なんですかそれは?」

裏蓮華 · · · それは体術の禁術中の禁術。

体内にある八門遁甲と呼ばれるリミッターをいくつかを無理矢理外して繰り出す術だ。

ただし、八門を無理矢理外すと本来の何十倍の力を引き出す代わりに術者の身体を崩壊していく。

八門全てを開けると火影すら上回る力を手にする代わり術者は死ぬ。正に禁術なのだ。

リーは構える。

リミッター外しをするようだ。

「第三正門 · · 開ー!」

第三正門を開く。

すると、リーの体の色が赤くなつた。

「せりに、第四傷門・・開！――ハアアアアア――！」

さらに第四傷門を開く。

普通の下忍ならこれでも「動く」ことができないのに、リーは鼻血を出すだけでとどまる。

「なんていう下忍だ。たつた鼻血だけですむとは。」

「努力で「じつ」なるもんじゃないな。これは正に才能があつたんだな。」

「動くぞ！」

ナルトの言葉と同時にリーが動く。

動いた瞬間、床がひび割れ土煙が舞う。そして我愛羅が蹴られた音が聞こえる。誰もが我愛羅とリーの姿を見失う。

「我愛羅は上だな。リーは我愛羅の周りを超高速移動で動き回つている。写輪眼じやなきや見えなかつたな。」

「速ええ！砂がまるでついていつてねえ。チャクラの探知でなんか見切れる。」

「この速さ、人体にただではすまないわ。リーはそれを承知で覚えたのね。」

「またに禁術だな。これほどとは、それを習得したリーもたいした

ものだ。」

サスケチームはリーを称賛し高評価する。

空中で我愛羅はあらゆる方向に飛んでいく。

下忍達には見えないが、リーが攻撃しているのだ。

我愛羅はリーの攻撃を全て食らい、鎧が剥されていく。

「これで最後です！！第五杜門・・開！――」

最後の攻撃をするようだ。

リーが我愛羅の腹を攻撃し、我愛羅は地面に吹き飛ぶが途中で止まる。

よく見ると我愛羅の体にリーの腕にある包帯が巻かれ掴まれていた。リーは包帯をおもいつきつ自分の方へと引っ張る。

「はああああ……裏蓮華――！」

右の掌底と右足の蹴りが同時にヒットし、おもいつきり地面にたたき付けられる。

落下中、我愛羅の瓢箪が砂に変わっていく。

そして我愛羅は床に激突し、リーはその横に落なし倒れる。

「あの瓢箪、砂できていたのか。あれで落下の衝撃を弱められたな。だが、かなりのダメージはあるはずだ。」

「しかし、それ以上にリーのダメージは大きい。裏蓮華中に筋肉が切れた音が聞こえた。あとどどめの時右足の骨がひび割れた音が聞こえた。もう動けないだろうな。」

サスケとラウリはリーと我愛羅のダメージ蓄積量を冷静に分析する。

我愛羅の砂がリーに迫る。

リーは這いすりながらも避けようとするが左手足が掘まる。

「砂漠柩！！」

「ぐわああああ！！」

砂の圧迫で左手足が折れる。

さらに砂がリーを襲う。

とどめをさすのだろう。

だが、ガイが乱入し我愛羅の砂をはらい。

それを見て、我愛羅は頭を押さえ苦しむ。

我愛羅は何故助けたのか聞く。

「こいつは・・愛すべきオレの大切な部下だ。」

それを聞き、我愛羅は戦つのをやめた。

「勝者、我愛羅！」

勝者は決まった。

だが、ガイの後ろに倒れているリーが立ち上がり構える。

誰もが信じられなかつた。

五門開けて手足を潰され人体の筋肉が切れてるのに立ち上がつたのだ。

立てるハズがないのにだ。

ガイがリーに近付く。

顔を見てガイは気付き涙を流す。

なんと、氣を失いながらも戦おつとしたのだ。

それに誰もが驚愕した。

「ロック・リー……なんて奴だ。氣を失つてゐるのに戦う姿勢を崩さないとは。」

「ロック・リー……彼もまた、立派な忍だったのだな。その立派な姿勢、評価に値する。」

サスケとラウリはリーを評価する。  
リーは医務班に運ばれる。

「ヒナタ。リーをどう見る?」

「……忍としての機能はもうできないでしょうね。禁術を染めたのならその覚悟があつたハズ。」

ナルトはリーがどうなるか聞くとヒナタが簡潔に答える。

「えーーーではこれにて第三の試験予選、全て終わりますー。」

## 予選終了（後書き）

予選終了し、いよいよ本選。  
しかし、火影から出た言葉は？  
次回、準備期間・・・

## 準備期間（前書き）

予選が終了した。  
いよいよ残すは本選のみ。

予選が終わり、勝者達は中央の印の石像の前に集まる。

「中忍試験第三の試験、本選進出を決めた皆さん。ゴホツ・・一名はいにこませんが、おめでとうござります。」

ハヤテが合格者を祝う。

(か) おひんいかむらを含む、木の葉七名砂、名一音

童一が「」とデス・キヌタは対戦者はいないため不戦勝である

「えー・・では、火影様・・どうぞ。」

「うむ。・・・ではこれから、本選の説明を始める。」

本選の説明が始まるとわかり、勝者達は緊張して聞く。

「以前もはなしたように本選は諸君の戦いを皆の前でさらすことになる。各々は各国の代表戦力として、それぞれの力をいかんなく発揮し見せつけて欲しい。よって本選は・・・一ヶ月後に開始される

!

一ヶ月後・・・その言葉に誰もが疑問に感じた。

これからでなく、何故一ヶ月後なのか？それは火影の次の話で分かった。

「これは、相応の準備期間といつヤツじや。」

「どういう事だ？」

誰もが思つた疑問をネジが聞く。

「つまりじや・・・各國の大名や忍頭に予選の終了を告げるとともに、本選への召集をかけるための準備期間。そしてこれは、お前たち受験生のための準備期間でもある。」

遠回しな言いかたをする火影。

「だから意味分かんねーじゃんよーどうことだ？」

「つまり、敵を知り己を知るための準備。予選で知り得た敵の情報を分析し、勝算をつけるための期間。これまでの戦いは実戦さながら、見えない敵と戦う事を想定して行われてきた。」

（なるほどな。確かに、砂以外は我愛羅が砂を使った術を使うなんて思わなかつただろうな。ま、俺には関係無い事だ）

サスケは大変だと感じながら他の奴等を見る。  
もつともサスケ本人はあまり興味が無い。

「しかし、本選はそうではない。宿敵たちの目の前で全てを明かしてしまつた者もおるだろう。相対的な強者と当たり傷付き過ぎた者

もおるじゅうじゅう。公正公平を期すため、一ヶ月間は各自更に精進し励むが良い。もうほん体を休めるも良し！」

つまり、本選には大名や忍頭がくる。

だが、すぐに入るわけがない。

最低でも一ヶ月はかかる。

ならば、その期間を有効に使えとこいつ」とだ。

中忍になるために。

「というわけでじゅ・・・そろそろ解散させてやりたいとこりじゅが、その前に一つ本選のためやつとかなきやならん大切な事がある。

」

誰もがイラつき始める。

サスケも早く帰りたいようだ。

「なんだよお！」

「まあ、そう焦らず。アンノの持つとる箱の中に紙が入つとるからそれを一人一枚取るのじゅ。」

「私が回るから順番にね！一枚だけよー！」

一人ずつ一枚紙を取る。

紙を広げると数字が書いてある。

「よし、全員取つたな。では、その紙の数字を左から順に教えてくれー！」

「ドス「一一一だ。」

トモル「1だあ。」

テマリ「9。」

カンクロウ「7。」

我愛羅「5。」

シカマル「10。」

ハナビ「3です。」

ネジ「2。」

シノ「8。」

サスケ「4。」

「どうことは、6番が彼ですね。」

「「むーではお前たちに本選のトーナメントを教えておくーー。」

トーナメント・・まさかそのためのくじ引きだったとは誰もが思わなかつた。

組み合わせの表が見せられる。  
誰もが緊張した面持ちで見る。

一回戦『日向ハナビ』VS『うちはサスケ』

二回戦『我愛羅』VS『うちはコラム』

四回戦『カンクロウ』VS『油女シノ』

五回戦『テマリ』VS六回戦の勝者

六回戦『ドス・キヌタ』VS『奈良シカマル』

トーナメント表を見て安堵した者、困った顔をする者、笑みを浮かべる者、どうでもいいといった者、様々である。

「では、それぞれ対策を練るなり休むなり自由にするがよい。これで解散にするが何か、最後に質問はあるか?」

「ちょっといっスか?」

「つむー。」

「トーナメントつむー」とは、優勝者は一人だけって事でしょう。つむーとは、中忍になれるのはたった一人だけってことっスか?」

それはシカマルなどの頭が良い者だけが気付いたことである。

「いやー、そうではない。IJの本選には審査員としてわしを含め、風影や任務を依頼する諸国の大名や忍頭が見ることになつておる。この審査員たちがトーナメントを通してお前たちに絶対評価をつけ、中忍としての資質が十分あると判断された者は・・・例え一回戦で負けてこいつとも中忍になることができる。」

つまり、IJにいる全員が中忍になれる場合やその逆に誰一人中忍になれない場合などもあるのだ。

勝つということは自身のアピールをする回数が増えるということだ。つまりトーナメントとは、自身のアピールを増やすための試合でもあるという事なのだ。

「では！」苦笑じやつた！ひと円後まで解散じやー！」

解散と言わたため、サスケはナルト達と一緒に会場を出る。

「俺はダンゾウ様のところに戻り一度報告しねー。それでは。」

「ウソだよ！」瞬身の術である。

「俺はもううんヒナタと一緒にいるやー。」

「私もナルトと。」

サスケは分かつてるとこつ感じで手を前に出す。

「俺は・・・どうが。修行をしながらのんびりするか。」

方針が決まりサスケはナルトとヒナタと別れる。  
期限は一ヶ月・・・その時、なにが起こるのか。

## 準備期間（後書き）

一ヶ月・・・それは長い休日。

サスケはこの一ヶ月をどう過ごすのか？

次回、一ヶ月期間・・・

## 一ヶ月（前書き）

準備期間。

三人はどうのように過ごす？

予選を終え、早一週間が経過した。

サスケは修業をしながらのんびりしていたが、途中で飽きた。

「修業ばかりでヒマだな。・・・散歩でもするか。」

サスケは修業を止め、散歩に出掛けた事にした。

サスケは町を見ながらゆっくり歩いて渡る。

そもそもサスケ自身、町をゆっくり周った事が無い。  
任務ばかりで無くても修業ばかりという生活をしているのだ。  
だから、こつしてゆっくり散歩をするのは初めてである。

「ふ～む・・こつして町を散歩するとほな。こつじてのんびりする  
のも悪くないな。」

「お～い・サスケ！」

すると、どこからサスケを呼ぶ声が聞こえてきた。

声が聞こえた方に向くと、そこにシカマルとチョウジとアスマが焼  
き肉屋の前に立っていた。

「シカマルか。どうしたんだ?チョウジとえーと・・・」

「ん？ そういえば自己紹介してなかつたな。俺は」「こいつらの担当上忍の猿飛アスマだ。」

「あ、  
はい。うち  
はサスケです。」

サスケはすぐに下忍としてのサスケにシフトチョンジする。

「それにしても、どうしたんだ?俺を呼んだんだ?」「

一 ああ、実はな。

— サスケ、ボケ達と一緒に焼き肉を食わなしけ? —

え？

チミウジが突然焼き肉と一緒に食わないかと言つてきた。  
何故かと聞けば、アスマが焼き肉をおこつてくれるそうだ。  
本当はいのも呼ぶつもりだつたが来れないそうなので三人で食おう  
と思つてたようだ。

「……嬉しご母し出だけじやおとくよ。そんなにお腹が空いてな  
こから。」

「そっか。悪いな、止めちまつてよ。」

「いや、それじゃあ。」

サスケはシカマル達と別れ、散歩の続きをする。  
その時、空を飛ぶ鳥にサスケは気付いた。

（すぐにこいだと？ダンゾウの奴、いったいなんの・・・まさか、  
任務か？）

サスケはすぐにダンゾウがいる根のこいの拠点に移動する。

サスケが散歩をしている頃、ナルトとヒナタはデートをしていた。  
今いる場所は少し離れた森の中にある。

「うーん、こいつ、デートも悪くないな！」

「そうね。フフ・・予選の時、負けてよかつたって本当に思つわ。」

「全くだぜ。サスケは『愁傷様としか言い様がないな。』

ナルトとヒナタは楽しそうにデートをし森を歩く。  
そこでナルトとヒナタはなにかに気付き見つけた。

「おい、あれ・・」

「トモルと確か・・伝説の三忍の一人の自来也・・・だったわね。」

ナルトとヒナタが見つけたのは自来也とトモルだった。  
どうやら修業の最中のようだ。

トモルは自来也から口寄せの術を教えてもらつてゐよつだ。  
しかし、全然成功してない。

「どうして自来也がいるのかしら？」

「俺を探してるのは、それとも大蛇丸か。そのどちらかだな。」

「ナルト君のこと、火影様が言つてなきやいいけど。」

「そうだな。とりあえずここにいてはいかんな。移動しようつか。どうか人気のないところに行つて一発やるか。」

「そうね。ふふ・・恥ずかしいわね。あの時できなかつたからね。楽しみだわ。ナルト君、優しくそして気持ち良くしてね。」

「分かつてゐぜ。そんじや離れますか。」

ナルトとヒナタは移動する。

その後二人は他にもネジやシノの修業を見、誰も通らないところで楽しんだ。

ダンゾウに呼ばれ、サスケは今ダンゾウがいる場所にいる。

「ダンゾウ、俺を呼んだのはなんだ? つまらん理由じゃないだろうな。」

「お前からすればつまらんだろう。だが、一応な。」

ダンゾウはもつたいぶつた喋りをする。  
サスケは少し苛立つ。

「自来也がこの里にいる。」

「自来也? 伝説の三忍のか。なんでだ? ··· ナルトか。」

「」明察。奴はナルトが生きてると信じている。だから「」の里に来たようだ。」

サスケは自来也がどういう存在か調べたため知っている。  
だから自来也がナルトを探すのは当然だ。

「やっぱり死体を用意しどきやよかつたな。死体がないから奴は探してるのである。そういうえばあのカカシもそうだつたな。」

「確かに、それは儂の失策だな。ナルトのは死体を用意しつければよかつたな。」

「まあすぎた」とは仕方ない。火影はナルトが生きてることを伝えたのか?」

「いや、その辺は口止めしたしお前の約束のおかげでなんとか誤魔化しておいてくれたようだ。」

火影は自来也にナルトが生きてることを伝えようとしたがサスケ達の約束のため喋らなかつた。

サスケ達との約束とは、ナルトとヒナタが生きてる事を絶対に言わ

ないという約束。

それを条件に三人は里の為に暗部として活動すると、拒否したら里を抜け出すと言った。

火影は仕方なく約束した。

「火影と約束してなきや、バレてたな。しかしそれで納得しないだろうな。」

「ああ、奴はナルトを探すだろうな。おそらくカカシとな。」

「それはかなり困るな。演技で『まかせるとはいえ相手は三忍、バレる可能性があるな。カカシまでだとめんどいな。写輪眼があるからな。今まで使われてないが使われたら厄介だな。ナルトには十分に気をつけるよつに言つておぐ。』

「わかった。」

サスケの言葉にダンゾウは納得した。

「用はそれだけか？」

「ああ。」

「なら失礼する。」

サスケは瞬身の術で去った。

「・・・あと一週間。それで今後の木の葉の運命が決まる。せいぜいあの三人にはしつかり働いてもらひ。ふつふつふつ・・・」

日が過ぎていく。

サスケはダンゾウにあつた次の日にナルトに自来也がきている事を話す。

ナルトは昨日、自来也を遠田で見掛けたと答えた。

これからは気をつけるように注意する。

それからはサスケは修業をし、時々散歩をしたりして過ごした。ナルトとヒナタはデートをし、たまにサスケの修業を手伝つたりした。

そうして一ヶ月が過ぎていった。

その間にいろいろな事が里で起こっていた。

ドスが我愛羅に勝負を挑んだがあつさり返り討ちにあい殺されたり。カブトと砂の担当上忍が密会し音と砂が同盟していたり、カブトを尾行していたハヤテが気付かれ砂の担当上忍バキの手により殺されたり。

ユラムが病室を抜け出しカカシと一緒に修業をしたり。

我愛羅が病室で眠っているリーを殺そうとするがトモルとシカマルが食い止め、一人は我愛羅の恐ろしさに気付きガイが止めたり。そうして時は過ぎていく。

しかし、サスケ達にすればどうでもよく関係の無い事だった。そして、第三試験本選当日がきた。

## 一ヶ月（後書き）

ついに本選当日。

まずは変更やルールを知る。

次回、本選開始・・・

一ヶ月の準備期間は終了した。  
さあ、戦つ時だ！

今日は本選当日、この日は中忍候補の有望な忍達の戦いが見れる日。そして、とても大きな事件が起ころる日もある。

会場にはたくさんの人々がいる。

観客席にはたくさんの客と忍頭達、大名達がいる。

そして中央には9人の下忍と審判の特別上忍が立っている。

本当は11人だが二人足りない。

観客席でも特別席には火影が座つており、そのそばには特別上忍が一人。

そこに風影と護衛の上忍一人が現れた。

風影がイスに座り火影が立ち上がる。

「えー、皆様このたびは木の葉隠れ中忍選抜試験にお集まり頂き、誠に有り難うございます!!これより予選を通過した10名の本選試合を始めたいと思います!!どうぞ最後まで、御覧下さい!」

「10名・・・火影はそう言つた。

本当は11名なのに、何故一人減つたのか。

簡単だ、我愛羅がドスを殺したからだ。

そのため変更があり、シカマルの対戦相手はテマリとなつた。ユラムはまだ来ていない。

「いいかてめーら、これが最後の試験だ。地形は違うがルールは予

選と同じで一切無し。どちらか一方が死ぬか、負けを認めるまでだ。ただしオレが勝負が着いたと判断したら、そこで試合は止める。分かつたな・・・

誰もが緊張する。

「じゃあ・・・一回戦。遠野トモル。日向ネジ。その一人だけ残して・・・他は会場外の控室まで下がれ！」

トモルとネジを除いた下忍達は会場外の控室に移動する。ちょうどその時、ナルトとヒナタが会場に到着し観客席に座る。

「いよいよ始まるな。」

「ええ。どうなるのかしら？」

「さあな。ただ・・・俺達は俺達のすべきことをするだけだ。」

「そうね。それにしても、暗部の数少くない？」

確かに会場内にいる暗部の数は少ない。10にも満たない数の暗部しかいない。警戒するにしてもこれは少ない。

「確かに。警戒はしてるのだろうが、少ないな。里周辺の方を警戒してるので？」

「可能性は高いね。でも今はこの試験に集中しよう。」

「だな。そろそろ始まるしな。」

ナルトとヒナタは試験に集中する。

「では第一回戦・・・始め！！」

本選当選（後書き）

ついに本選が始まった。  
まずは一回戦と二回戦。  
次回、節穴の日向家  
・・・

哀れな田向家（前書き）

本選第一回戦・・・  
始まりの企図がなる。

## 哀れな日向家

審判の合図がなりトモルはその場で構え、ネジは白眼を発動し日向家の構えをとる。

トモルは力カシから聞いた日向家の白眼や柔拳がどんなものか思い出していた。

トモルは影分身四体ほど出して様子を見ることにした。  
分身体四体がネジに攻撃を仕掛けるが、ネジはなんなく四体の分身体を倒した。

トモルは今度は多数の分身体を出した。  
多数の分身体はネジに向かつて突っ込む。

ネジは白眼を駆使して多数の分身体の攻撃を避けていく。  
ネジは躲しながら離れたトモルを狙う。

そして、近付き離れたトモルに柔拳を食らわす。  
トモルはまともに食らい、口から血を吐き出す。

ネジは笑みを浮かべる。

誰もが終わったと思う。

だが、攻撃を食らったトモルがポンッと音がなり煙となり消えた。

そう、実はこのトモルは分身体なのだ。  
本体は・・・

(オレの考えの裏をかいて分身の一体にワザと、引かせていただと  
!—)

「そもそもこいつらは、玉碎覚悟で突っ込んでんだアーーー！」

本体は分身体と一緒に突っ込んでいたのだ。

分身体一体と一緒に一方向から攻撃を仕掛ける。

まさに裏をかいだ戦術だ。

これは決まったと思つた。

だが、ネジの身体にチャクラの幕が包みこまれトモル本体と分身体の攻撃を受け止める。

「ハツーーー！」

そしてそのままネジ自身の体を駒の様に円運動し、いなして弾き返した。

それを見た日向家、特にヒアシとハナビは驚いた。

「あれは、八卦掌回天か。」

「へえー、習得してたんだ。しかも独自に・・・だつたら、アレもかな？」

ナルトとヒナタも少しば驚くが、それだけだ。

トモルは回天を食らい、吹き飛ばされた。

トモルはなんとか起き上がるが。

「これで終わりだ。お前はオレの八卦の領域内にいる。柔拳法、八卦六十四掌！」

ネジは左手足を前にだし、変わった構えをとる。それを見て、ヒアシとハナビは驚愕する。

「八卦・・・一掌一四掌一八掌一十六掌・・・三十一掌・・・六十四掌  
！！」

ネジは点穴を狙つた連續突きを食らわす。

トモルはモロに食らい、吹き飛ばされる。

点穴を突かれ、トモルはチャクラを練れなくなる。

（さすがはヒザシの子か。だが、我が娘には届かん。ハナビはまだ幼いが必ずヒザシの子を上回る！）

トモルはなんとか立ち上がり、チャクラを練ろうとするが、点穴を突かれてるためチャクラは出ない。

そして、ネジの柔拳を食らいトモルは倒れる。

今度こそ起き上がりなくなりそのまま気を失う。

「…勝者、日向ネジ…！」

ネジの勝利で一回戦を終えた。

トモルは医療班に連れて行かれ、ネジは控室に移動する。

「では、次の組み合わせ日向ハナビとつむはサスケ。下へ！」

審判が一人を呼ぶ。

ハナビとサスケは下に降り、中央に立つ。

サスケ自身、この試合にあんまり興味無い。

こんな試合、棄権してもよかつたがサスケはある目的で出ることにした。

それは、嫌がらせである。

どんな嫌がらせかというとハナビに勝たせて日向家が木の葉最強の名家だと知らしめるということ嫌がらせだ。

これに気付くものはナルトとヒナタと根の者達しかいない。

「ふふふ・・・コラムでは無いですがあなたもうちは家の者。あなたに勝てば日向家は最強だと知らしめられますね。覚悟して下さい！」

ハナビは相変わらず見下した物言いをし、サスケを挑発する。サスケはそれに乗らず、速く試合をしてほしそうだ。

「これより第一回戦、始め！！」

ハナビは日向家の構えをとる。

サスケは後方に下がりながら印を組んでいく。チャクラを練り上げる。

「火遁、豪火球の術！！」

サスケは豪火球を放つ。

もちろん下忍の威力バージョンで。

ハナビはおもいっきり後方に飛び躲す。

さつきまでいたハナビの場所は小さなクレーターができた。

サスケは起爆札付きクナイを数枚投げるが、ハナビは全てを躲す。

地面に突き刺さった起爆札付きクナイは爆発し、小さな穴ができる。

「接近戦を仕掛けてこないのですか？小心者ですね。臆病者には離れた場所からコソコソやるのはふさわしいです。」

ハナビはサスケを自分の領域にくる様に挑発してくる。

サスケはわざと挑発に乗り、両手にクナイを持ち構える。

左手のクナイは逆手にして。

そのままサスケは真正面から突っ込む。

「はあああーーー！」

サスケは攻撃を仕掛ける。

ハナビはそれを躱していく。

サスケはまるでアクション特撮のような、ダイナミックな攻撃アクションを繰り出す。

ジャンプしながら一、二回転しながらクナイの切り付け攻撃をしたり、バック転しながらの蹴りなどの攻撃をする。

しかし、ハナビはそれらを全て躱す。

いや、全て躱せるようにサスケが下忍でも躱せる攻撃をしているだけだ。

「所詮はこの程度ですか。いくらうちはでも田向には勝てない。私の敵ではありません！」

ハナビは見下した物言いでサスケをバカにする。

サスケはどうでもよかつたので無視し、連續攻撃を続ける。

「これで終わりです！」

「・・・・グフツー！」

ハナビの柔拳の掌底が決まり、サスケは口から吐血を吐く。もつとも、サスケはチャクラでダメージを押さえ吐血する程度に止めたがハナビはおろか田向家の者たちは誰も気付かない。

「勝負ありですね。あなた」ときでは私には勝てない。」

「グツ・・・ハツ・・・」

サスケはよろよろと下がる。  
苦しそうな表情だ。

「分かりましたか？ 最強はうちはではありません。 我が日向家が最強なのです。」

ハナビは勝利の美酒に酔い痴れている。

「・・・審判。 ギブアップします。」

サスケはギブアップ宣言をした。

「・・・勝者、 日向ハナビ！！」

勝者はハナビとなつた。

サスケは医務班に運ばれて行つた。

ナルトとヒナタは席を外して医務室に移動する。

（この程度とはな。 うちはもお終いだな。 もう一人うちはがいたが  
我が娘にはかなわんな。 そう、 我ら日向家こそ木の葉最強なのだ！）

ヒアシはハナビが勝つた事に優越感を得ていた。

自分達日向家の強さを世間にしらしめられたのだから。  
所詮この男も愚かで節穴のマヌケだ。

サスケは医務室に運ばれ、二人の医務班がそばにいる。  
その時、突然一人の医務班が眠るように倒れた。

「よつ！」

「気分はどう？」

扉からナルトとヒナタが入ってきた。

二人の医務班が倒れたのはヒナタが幻術を掛けたからだ。

「別に。それより、治療頼む。」

「分かつたわ。」

ヒナタはサスケに掌仙術で治療する。  
サスケの傷は治癒される。

「よつと。さて、これからどうする？試合を見るか？」

「いやだ。もう興味ないし。さつさと会場から出ようぜ！」

「私もナルト君と同じ。さつさと去りたい。」

「決まりだな。」

三人は医務室から出て会場から出た。



哀れな日向家（後書き）

サスケ達三人は会場から抜け出す。  
そして、ついに起こる。

次回、陰謀・・・

## 始まる歓喜（前書き）

試合はまだ残っている。  
ただし、それが合図になるとは知りません。

サスケ達三人は会場から出て、火影岩の頂上に立つてゐる。もちろん、暗部服を着て。

「ふわあ～、眠い。早くおきねえかな。ヒマでしちゃがないぜ。」

「確かに眠い。もしもよつに本とか持つてきてなかつたら散歩に出来かけていたな。」

「そうね。さすがに任務じゃあ、ゆつくりできないからね。」

三人は本を読んだり雑談したりしてヒマを持て余してゐた。

「会場に出てどれくらい経つた？」

「約一時間つてところかな。今頃会場はどうなつてゐるかな？」

「ついさつきコラムが会場に着いたから今頃コラムと我愛羅の試合中つてどこかな。」

「なら、そろそろだな。」

サスケの言葉にナルトとヒナタは氣を引き締める。

「とりあえず、会場で何か起こつたら、作戦を開始する。」

三人は会場を見る。

少し時間をさかのぼり、サスケとハナビの試合を終えたあと。次の試合、コラムと我愛羅の試合が始まるのだが、肝心のコラムがまだ来てないのであつた。

火影はユラムの失格にしようとしたが、風影が後回しにしてほしいと頼んできた。

もちろん、理由もしつかり答えた。

答えは簡単、この会場にいる大名や忍頭はコラムと我愛羅この二人の試合を見にきたのだ。

さらに風影も我愛羅の強さを見せるためだと言つてきたので火影は後回しにすることにした。

後回しにされたので、次の試合カンクロウとシノなのだが、カンクロウは棄権すると言つた。

その理由は彼の傀儡『カラス』には仕込みカラクリがあるのだ。とある計画の前に敵に見せるのは得策ではないからだ。

もちろん、シノと審判は知るよしもない。

カンクロウが棄権したため、シノの不戦勝で終わる。

次の試合はテマリとシカマル。

テマリは巨大扇子を操り下に降りる。

シカマルは棄権しようとしたが、シノによつて下に落とされた。

シノはシカマルに頑張れとエールを送るつもりで軽く背中をたたいたつもりだったが、シカマルが身に乗り出したことと思いの他たた

く威力が大きかつたために下に落ちたのだ。

シカマルはやる気がない顔でテマリを見つめる。

テマリは審判の合図を待たずにシカマルに攻撃を仕掛ける。

・・・が、シカマルは間一髪で避ける。

そのままテマリは追い討ち攻撃を仕掛けるが、シカマルはそれより速く避け木の影に隠れる。

躊躇したあと、シカマルボ～ツとした表情で空を見上げる。

シカマルはやる気が全くないのだ。

忍になつた理由も人生を楽しく生きてけそつだからだ。

テマリはそんなシカマルの表情を見て苛立つてきた。

「忍法カマイタチ！！」

テマリが扇子を振るうと真空の刃がシカマルを襲う。風の刃は木に切り傷を作り肌や服に傷を作る。

まさにカマイタチの名にふさわしい忍術だ。

シカマルも負けじと影真似の術を繰り出しテマリを捕らえようとする。

が、テマリはバック転をしながら影に掴まらないように距離をとり逃れる。

しかし、ある程度の距離で影はピタリと止まり縮んでいく。

テマリは影が止まった場所に線を引き、影真似の術の攻撃限界距離を測る。

テマリは影真似の術の正体に気付いたのだ。

シカマルも自分の影真似の正体に気付いている。

しかし、シカマルは落ち着いており目を閉じ奇妙な印をとる。

これは、印では無くシカマルのクセのようなものだ。

シカマルがやつてることとは戦略を練つてゐるのだ。

シカマルの趣味は将棋でそれが得意だ。

将棋は元々軍師が戦略を練るのに使つてた駒がそういう遊びになつ

たとこからうまれたのだ。

つまり、シカマルはキレ者なのだ。

しかも、ただのキレ者でもすば抜けたキレ者・・・シカマルはIQ一百以上の超天才の頭脳の持ち主なのだ。

ちなみにこれは奈良家では珍しくもなくそのほとんどが頭がいい者が生まれるのだ。

つまりシカマルはそういう生まれの運命だったのだ。

シカマルの思考が終わり、行動を開始する時が来た。

テマリはカマイタチでシカマルに攻撃させないよう攻めまくる。

シカマルも負けじとクナイを投げ動きを封じながら影真似を発動する。

テマリは慌てなかつたが、あることに気が付いてすぐこきりこ距離をとる。

影真似のさうなる特長、それは影の名の通り少しでも光があれば影の中に影ができるのだ。

そのおかげで影はさらに距離が伸びるのである。

そこからシカマルはあらゆる策を使つ。

上着を使って影を使つてさうに距離を伸ばしたりヒヤッとした攻撃を仕掛ける。

しかし、テマリはそれをこじとく躲す。

そして、テマリは大勝負を仕掛けようとするが突然体が動かなくなつた。

「フー、よつやく影真似の術成功！」

誰もが疑問に思つ。

どうやつてつかまえたのか。

シカマルはテマリに後ろを見させる。

見ると、そこらへんにある小さな穴から影が通つており、テマリの背後にある穴から通つた影がテマリを捕らえていた。

この小さな穴は前の試合でサスケが投げた起爆札付きクナイででき  
た小さな穴だ。

シカマルはそれを利用したのだ。

捕まえたあと、シカマルは突然ギブアップを宣言した。  
理由は一つ、一つ田は影真似を使いすぎたためチャクラが切れかか  
つてゐるのだ。

一つ田はめんじくもくなつたらしく、一試合で十分なようだ。  
一つ田はともかく一つ田はシカマルらしい理由だ。  
テマリとシカマルの試合を終えその一、三分後にコラムとカカシが  
会場に到着した。

「名は？」

「うちは・・・コラム。」

コラムは遅刻したが、後回しにされたため失格にならなかつた。

審判が我愛羅を呼ぶ。

我愛羅はゆつくり下りてきた。

コラムと我愛羅は睨み合つ。

審判が開始の合図を言つと我愛羅は砂を出し、コラムは後方に下が  
る。

コラムは先制に手裏剣を投げるが砂によつて防がれ砂の盾から砂分  
身ができる。

コラムは接近し砂分身を倒し我愛羅を殴るつとするが、砂の盾に遮  
られる・・・直前に我愛羅の視界からコラムが消え、いつの間にか  
背後に回つていた。

コラムを見た我愛羅は予選で戦つたリーと重なつて見えた。  
我愛羅は殴られ少し吹き飛ぶ。

これを見たガイとリーは驚く。

それはまさに重りをはずしたリーそのものだつたからだ。

コラムはさらに攻撃を仕掛けた。

砂の盾は追いつかなくなり、砂の鎧で防ぐほかすべがなくなる。

コラムの連續攻撃が決まり、砂の鎧は剥されていく。

しかし、コラム自信もスタミナをかなり消耗していた。

下忍であれだけのスピードを出せばそつなるは必然である。

その時、我愛羅は砂を覆い自信を隠す。

それはまさに卵の殻のようになつた。

コラムは攻撃するが、全く効かない。

それどころかカウンターされかける。

コラムはかなり距離をとり、壁に張り付き印を組み左手にチャクラを集中する。

左手からチッチッチッ・・・と音が響き雷ができる。

その術が完成し、我愛羅に向かつて突っ込む。

これはただの突き、しかし木の葉一の技師コピー忍者カカシのオリジナル技。

その名は・・・

「千鳥！――」

千鳥が決まり、砂の殻を貫いた。

ちなみに、サスケは千鳥から形態変化まで出来るのですでにカカシより千鳥を使いこなしている。

我愛羅の絶対防御を貫いたため、カシクロウとテマツに担当上忍は驚愕している。

「うわああ――血があ・・・オレの血があ――」

すると、砂の殻の中から我愛羅の悲鳴が聞こえた。  
コラムは何かに掴まれる感覚を感じ、引き抜く。  
引き抜くとそれは異形の腕が出てきた。

異形の腕は殻の中に戻る。

コラムは空いた穴から中を覗く。

コラムの目に何かの目に睨まれ寒氣を覚える。

砂の殻は割れ砂に戻る。

そこには左肩に傷が付き、血が流れている我愛羅の姿が。

すると、コラムと我愛羅の周りに無数の白い羽根が舞う。

それを見た観客席の者達は眠ってしまった。

これは幻術である。

それに気付いた木の葉の上忍と暗部は幻術返しをし、幻術を解く。

その時、火影と風影がいる所に煙がたちこめる。

そして、里の外では巨大な大蛇と多数の音忍と砂忍が里に攻め込ん

できた。

「始まつたな・・・」

サスケの声が合図となつた。  
木の葉崩しの始まりだ。

## 始まる野望（後書き）

ついに木の葉崩しが始まる。  
しかし、サスケ達は表に出ない。  
次回、木の葉崩し・・・

影で動く者達（前書き）

木の葉崩し起動。  
戦は始まつた。

サスケ達三人は正門から大蛇が現れるのを目撃していた。

「どうやら始まったようだな。これより作戦を始める。」

「ああ。一尾の人柱力我愛羅はどうするんだ？」

「放置だ。もし人柱力が出てきたらナルト、お前に任せる。ただし、殺すなよ。殺したら一尾が出てきて面倒いからな。」

「分かつた。」

「それじゃ、改めて作戦内容を教えて？」

「わかった。俺達の任務は侵攻してくる音忍と砂忍を始末すること。他の木の葉の奴等に気付かれないように行動すること。正門を俺が、右の方をヒナタが、左はナルトが対処してくれ。ただし、さつきも言つたがナルトは一尾が出たらそつちにまわってくれ。」

「「了解。」」

三人は変化をし、面を被る。

「よし、任務開始！」

三人は戦場に跳ぶ。

正門では大蛇の他、音と砂が入ってきて侵攻を開始していた。そんな中、サスケは人に見られないように敵を仕留めていく。誰にも見られないように移動しながら音も経てずに敵の命を絶つていく。

「こんなもんか。大したことないな。」

そう言いながらサスケは刀を振るい、クナイや手裏剣を投げ敵を殺していく。

まさに暗部として動くサスケであつた。

左の方ではナルトが敵を蹴散らしていく。大刀で敵を切り裂いていく。

気付かれないように戦うためチエーンソーのようにできない上、ゆっくりもできない。

しかし、ナルトはお構いなく敵を絶命させる。

「チツ、ゆっくり殺れないからつまらないぜ。一尾の人柱力に会いに行って戦つてこようかな。」

そんなことを考えながらナルトは別の場所に移動を開始する。

右ではヒナタが鉈で敵のスプラッタを公開させる。

脳天からかち割つたり、脇腹を抉り血飛沫が吹き出、肩から突き刺されたりと敵は残忍に殺されていく。

ヒナタは無表情で敵と対決し、全てを一撃で仕留めていく。

「チームワークがなつてませんね。それでは殺して下さいといった感じね。」

ヒナタは迫つてくる相手に迎撃しました命を奪つていく。

サスケは何十何人かの命を奪つた時、ナルトから心念の術を使って頭から声が聞こえてきた。

(サスケ！ヒナタ！)

(なんだ？)

(どうしたの？)

(悪い。これから一尾の人柱力のところに行つてくる！)

(・・・なにがあった)

(「どうやら一尾が出てはじめてるみたいだ。」そのままだと一尾が出てへ  
るかもしない)

(確かにやばいな・・・別に一尾が出て木の葉を襲うと関係ないが、  
後のことを考えるとそれはよろしくないな。わかつた、一尾のほう  
はお前に任せる。動けなくしてやれ。ただし、殺すなよ。殺したら  
一尾が出るからな)

(わかつてるぜ!任せな!)

(気をつけたね)

(ああ、ヒナタもな)

ナルトが我愛羅のほうに跳んで高速移動する。  
サスケとヒナタは多少の心配をしながらナルトのほうに顔を向ける。  
その間にサスケとヒナタの方でも戦いに変化が訪れた。  
よくみると暗部や旧家の忍達が敵をたくさん蹴散らして活躍してい  
る。  
そのおかげで敵の数はかなり減つており壊滅も時間の問題となつて  
いた。

(「どうやら一尾まだだな。・・・ヒナタ、聞こえるか。・・・」)

(聞こえています)

(任務は終わりだ。この場から去る)

(了解。私はナルト君のところにいくわ)

(・・・わかつた。好きにしな)

サスケはその場を素早く去る。

ヒナタはナルトのあとを追いに行つた。

その頃、会場にいた我愛羅とユラムは会場を出て離れた森で再選していった。

しかし、我愛羅は一尾の力を解放しかけて身体の一部が一尾・・・いや、守鶴と化した。

そのおかげでリー以上のスピードと人外級の破壊力でユラムに襲いかかる。

ユラムは抵抗するが、力の差と呪印により瀕死近くまで追い詰められる。

その時、トモルとサクラが現れる。

トモルが何故いるのかといふと、柔拳と点穴を食らつていたが医務班のおかげで全快とはいかないがかなり回復した。

そのおかげでユラムの援護に向かえたのだ。

しかし、姿がかなり変わった我愛羅を見て恐怖し、足がすくんだがサクラの無謀ながらの抵抗とユラムの自己犠牲を見て恐怖は消え守るという強い気持ちが出てきた。

ユラムはその大きなチャクラ量を駆使した大量の影分身をだし数の暴力を仕掛ける。

我愛羅は追い詰められ、とうとう完全体になり巨大な狸となつた。

それをぼーぜんと見上げるトモルとコラム。

そんなトモルに我愛羅は砂漠柩を掛ける。

砂に埋もれ、トモルは絶対絶命のピンチになる。・・・が。

「つねりああーーー。」

雄叫びとともに我愛羅は突然頭に衝撃がきて前のめりに倒れる。

黒い影が我愛羅の頭に攻撃したようだ。

黒い影がトモルの隣りに立つ。

トモルはビクッとしたながら恐る恐る影を見る。

それは・・・

「・・・・」

「だ、誰だアーーー？」

「暗部じゅじゅ？」

「狐の面？」

それは狐の面を被った暗部・・・そう、ナルトだ。

ナルトは高速で印を結ぶ。

「涅槃精舎の術。」

ナルトはカブトが掛けた幻術をトモル達に掛ける。

トモル達は幻術返しをすることもできず、幻術に掛かり眠る。

「幻術は苦手だが、まあこいつらには十分だな。あとで記憶も変えないとな。」

ナルトは幻術を掛けられて安堵する。  
ナルトは我愛羅を見る。

「誰だ・・・貴様は?」

「・・・俺は貴様と同じ化け物を飼つてる者だ。」

「なに?」

今ここに、一尾の人柱力と九尾の人柱力との戦いが始まる。

影で動く者達（後書き）

人柱力同士の戦い。

しかし、圧倒的実力差が我愛羅を襲う。

次回、人柱力としての差・・・

人柱力としての力・・・そして木の葉崩し終結（前書き）

一尾の人柱力我愛羅・・・九尾の人柱力ナルト。  
人外の力を持つ者同士の戦いが今始まる。

## 人柱力としての力・・・そして木の葉崩し終結

「俺と同じだと・・・？」

我愛羅はナルトの言葉に疑惑を持つ。  
突然自分と同じ存在だと言わなければ誰だつて驚き、疑惑やびっくりする。

「まあ、信じる信じないはそつちの勝手だがな。が、今はそんなことじゃない。俺がすべき事はたつた一つ、てめえをぶちのめす！それだけだ。」

「ぶちのめすだと？ クツクツクツ・・・貴様ごときにか？ 俺をぶちのめすだと？」

我愛羅はナルトの台詞にバカにしたように嘲る。

「同じ人柱力として貴様のその姿と実力は見るに堪えん。はつきり言つて我慢の限界だ。てめえをぶつ殺してやりたいが、殺したら面倒ごとが起こるから動けなくなるまでボコボコにしてやる。」

ナルトは自らの本心を我愛羅にぶつける。

ナルトにとつて我愛羅は人柱力として同じ尾獸持ちとして情けないとしか言い様がない。

ナルトは九尾を制御できるに対して我愛羅は一尾を制御できてい。

恥ずかしすぎて仕方ないのだ。

「ほぞけええーーー！」

我愛羅は砂漠柩を掛けるがナルトは素早く躲し懐に入る。

「大玉螺旋丸ーーー！」

ナルトは我愛羅の腹に大玉螺旋丸をぶつける。

モロに食らう我愛羅はおもいつきり吹っ飛ぶ。

「ぐううつーーー！ あたまアアー！」

「その団体は飾りか？俺はーーーいるぜ？」

ナルトは我愛羅の前方にある木のてっぺんに立つている。

「うおおーー！」

我愛羅は右腕でナルトを捕まえようとする。

「だから遅いって言つてるだろーーー！」

「ーーーああーーー！」

ナルトは瞬身の術で躲し素早く背後に現れ背中をチャクラで込めた蹴りを食らわせ蹴り飛ばす。

蹴り飛ばされ前のめりに倒れ数m滑る。  
ナルトは近くの木のてっぺんに着地する。

「こJの程度かよ。こんなんじや 九尾の力を使う必要は無いかな。」

ナルトは小さな声で独り言を言つ。

「・・・クツ、クツクツクツクツ・・・ハーツハツハツハツハツハツハツ！」

我愛羅はその巨体をゆっくり起き上がり、突然おもいっきり高笑いをあげた。

いきなりの高笑いにナルトは引いた。

「なに笑つてやがる。」

「これだ！この痛み！この感覚！わつきの「つちはや分身野郎とは桁違いの痛み・・・これだ・・・」の感覚・・・きさまは強い！きさまのよくな強い奴を殺せばより強い、強い生を実感できる！」

「・・・」

「うおおおーー砂時雨ーーー！」

無数の砂の弾丸がナルトを襲うが、跳んで軽く躱す。

「風遁・風塵裂破ーー！」

ナルトは背後から風遁の術を放つ。

強烈な突風と幾つもの風の刃が我愛羅の身体に直撃する。

吹き飛ばされ、切り裂かれた傷が幾つもできる。

「ば、バカな…あの完全体の我愛羅にあれだけの傷を…！？そんな…奴は何者なんだ！？」

離れた場所で見ていたテマリはナルトの強さを見て驚愕し、恐れる。

「ヒヤハハハハ…面白い…面白いぞオオオ…！」

完全体の守鶴の額から人柱力の我愛羅の上半身が現れた。

（や、やばい…我愛羅の奴やるつもりだ…とにかくここから逃げないと…）

テマリはそれを見て恐怖し、この場から急いで離れる。

「ここまで楽しませてくれた礼だ。砂の化身の…本当の力を見せてやる！」

我愛羅は印を結びチャクラを練る。

「狸寝入りの術！！」

術名を言い、我愛羅は眠り代わりに一尾守鶴が目覚めた。

「シャハハハハアアツ…！…やつと出で来られたゼエエ…！」

「アレが一尾守鶴かよ。なんつうか陽気な奴だな。」

「ん？！ひやつはあ～～！いきなりぶち殺したい奴、発け～～～～ん！！」

「尾守鶴はナルトを見つけ殺す宣言をする。

「風遁…練空弾…！」

「尾守鶴は左腕で自身の腹を叩き、口から真空の塊を吐き出す。ナルトは跳んで躲す。

「へえ…、一応は尾獣の一體の一尾だな。かなりの攻撃だな。」

「練空弾…！」

「尾守鶴は跳んだナルトに田掛けて練空弾を五連発、発射する。ナルトは四発までは躲すが、最後の一発は躲せなかつた。

「チイツ…」

「防御もできず、直撃し爆発する。

「キイエーイ…やつイ…殺したア…殺したア……」

「尾守鶴は、めんじくさこから守鶴にします。とにかく、守鶴は高笑いを上げ気分がよかつた。

「誰を殺したつて？」

「その時、右側から声が聞こえ顔を向けるとそこに無傷のナルトが木のてっぺんに立つていた。

「貴様…ビリヤッて躲した…当たつただろ…」

「変わり身の術だ。こんな単純で基本な術にすら気付かなかつたのか。」

ナルトは当たる直前に丸太に変わり身をしていたのだ。

「それにしても、これで同じ尾獸かよ。はっきり言ってがっかりだ。

」

「なんだと！？」

「はっきり言って貴様のその姿は同じ尾獸持ちとして見るに堪えん！俺が本当の人柱力としての力を魅せてやるーいくぜ、力を借りるぜ九尾！」

そう言つと、ナルトの身体から赤いチャクラが溢れ出す。赤いチャ克拉が具現化し、チャ克拉の尻尾が出てきた。九尾のチャ克拉が出たのだ。

「覚悟はいいな。」

「！！？」

守鶴の目からナルトが消えた。

「『じ』があああつ！」

守鶴の腹に激痛と衝撃がきて、おもいつきり飛ばされる。ナルトが一瞬で守鶴の腹に入り蹴りをいたのだ。

「てめーー練空弾ーー！」

「…がああっ！…！」

「んなにイー！」

守鶴は練空弾を放つが、ナルトはチャクラの衝撃波でかき消した。

「うおおあああ！…！」

「ぎがあああっ！」

驚いている守鶴に高速移動しながらチャクラの爪で引き裂いていく。守鶴の身体は爪によつて引き裂かれた傷がたくさんできる。

「が、がああ…くそつたれ…」

「どうしたよ。もつグロッキーか？結局は見掛けの団体か。九尾も嘆いてるぜ！」

『嘆いてるものかア！あんな狸と儂を同じにするなア！所詮は力の差も知らぬ脳筋狸だア！』

ナルトの言葉に体内にいる九尾が怒る。九尾の声が聞こえるのはナルトのみ。

「さて、そろそろ一尾の人柱力を叩き起ししてやるか！」

「ふざけるなア…！」

守鶴は右腕を振るいナルトがいた木々をなぎ払う。

「やひーつー起きやがれ！」

ナルトはあつさり躲し、我愛羅の左頬を殴る。

「グゥウッ…チクショウガアアー出できただばつかりなのによオー…！」  
「こいつをぶつ殺してねえのにイイイー…！」

術が解け守鶴が眠る。

我愛羅は田を覚まし、ナルトを睨み付ける。

（よくも…よくも俺の術をあお…！）

ナルトは守鶴の額に乗り、その場から上空に跳ぶ、  
我愛羅はナルトを追うように上空を見、怒りに染まる。

「死ねHーーー！」

我愛羅は砂でナルトを捕らえようとするが、チャクラの『氣合い砲』で  
砂を弾き吹き飛ばす。

そのままナルトは我愛羅に田掛けて落下していく。

「螺旋丸！ーーー！」

急降下しながらナルトは我愛羅に螺旋丸を食らわす。

「ぐおおおおおーーー！」

モロに食らって守鶴にヒビが割れ崩れしていく。

我愛羅は吹き飛び、地面にたたき付けられる。

仰向けに倒れ、チャクラも使い果たし我愛羅は動けなくなつた。  
そんな我愛羅の横にナルトは軽やかに着地する。

「ふう〜。」

ナルトは首や肩をゆづくじ回しながら我愛羅を見つめる。

（二）、殺される・・・

「ぐ〜ぐるなあつー」

「いかねえよ。お前を殺すと面倒な事が起るからな。それで、氣分はどうだ？」

「なに・・・？」

「同じ化け物持ちでもこれほどの差があつたんだ。せぞ悔しいだろ？所詮貴様はこの程度なんだよ。」

「な、なんだとー？」

ナルトは我愛羅に挑発するような震むような口調で話しかける。

「てめえは守鶴を使いこなしてはいない。ただそれに振り回されてもるだけだ。そんな貴様を屠つても仕方がないんだよ。はつきり言つて貴様は弱い・・・弱すぎる。」

「ややまアアー！」

「せめてその守鶴をコントロールできるくらいは強くなつてからか  
かってこ。」

「ぐつひー。」

ナルトはそう言い、我愛羅を見下す。

我愛羅はナルトを殺氣を放ちながら睨み付ける。

「じゃあな。もう一度と会つことはないだろ？がな。」

「待て……」

「あ？」

「貴様の名は……」

「……本来は名乗らないんだがな。暗部名は金狐……本名はつすまきナルト。」

「つすまき……ナルト……覚えておく……次に会った時は必ず貴様を殺す！待つていろ！」

ナルトはそれを聞き、トモル達が眠っている場所まで移動する。そのままあと我愛羅のそばにテマリとカシクロウが現れ連れ帰った。ナルトはトモル達のそばに着地し、その近くにヒナタもいた。

「お疲れ様。結界が張つてゐおかげでここはばれてないわ。」

「結界と幻術は苦手だからな。上手くいってよかつたぜ。」

「ふふ……彼等の記憶改ざんは任せとけ。私がやるから。」

「頼むな。」

「ええ。」

ヒナタはトモルとコラムさらに忍犬のパックンに記憶改ざんする術を掛け、ナルトの事を忘れさせた。

それを終え、ナルトとヒナタは結界を解きこの場から去った。

ナルトと我愛羅との戦いが終わって数分後、木の葉崩しはここに終結した。

木の葉崩しは失敗に終わった。

その代償は決して高くなかつた。

火影の死の他に大勢の死者と負傷者を出して。

人柱力としての力・・・そして木の葉崩し終結（後書き）

木の葉崩しはここに終わる。  
だが、新たな始まりはすでに動いている。  
次回、帰ってきた者・・・

戻ってきた者（前書き）

木の葉崩しが終わった。

しかし、それは新たな戦いの前触れ・・・

## 戻ってきた者

木の葉崩しから一日が経つた。

この日は雨が降つてあり、まるで死んだ人々を悲しんでるかのよう

に。

そう、今日は火影の死を黙祷する日だ。

誰もが出ており火影の死に誰もが悲しむ。

否・・・数人は悲しんでいなかつた。

それから数日が経つた。

誰もが里の復興に勤しんでる中、サスケはダンゾウと会つていた。

「火影は死に、これでアンタが火影になる時がきたな。」

「・・・いや、儂はまだ火影にはならん。」

「どういう事だ？」

サスケは疑問に思う。

今の里の状況はガタガタでトップがない。

したがい誰かが火影にならなければならぬ。  
現状ではダンゾウが火影にふさわしいはずだ。

「儂は根のトップだ。それにさきの戦があつたとはいえこの里は平和ぼけしておる。儂のよつた武闘派は必要無いようじや。」

「なるほどな。しかし、そうなると誰が火影になるんだ？現状で考えると自来也か？」

「いや、あやつは断り代わりに綱手が選ばれた。」

「綱手？確かに伝説の三忍の紅一点で医療忍術のスペシャリストだったな。」

綱手には二つ名があり口寄せでナメクジを呼ぶためナメクジ姫とも呼ばれ、賭け事にめっぽう弱いため伝説の力モとも呼ばれている。

「しかも、あの女はあの初代火影様の孫娘だ。火影の器にふさわしいのさ。」

「なるほど。しかし、そう簡単に見つかるのか？聞けば転々と各地を逃げ回つてゐるって話しだ。大丈夫なのか？」

「心配はいらん。情報によれば綱手はそんなにこの里の近くの町におるらしい。」

「なら、大丈夫か。まあ俺には関係無いな。俺達の存在がばれなきや誰が火影になろうが知つた事ではない。」

「フン・・・」

サスケにとつて誰が火影だらうと自分達の目的の前には関係無いのだ。

「さてと、俺はそろそろ帰るが。いつまでもこんなところは居たくないからな。」

サスケはこの場から去るつとする。

「ダンゾウ様。」

すると、一人の暗部がダンゾウの前に現れ跪く。

「なんだ?」

「ハツ、正体不明の者が一人我が里に潜入したもよつ。」

「正体不明だと? 身元は判明されてらんのか。」

「はい。申し訳ありません。」

(正体不明=人・・・まさか)

サスケはなにかに気付いた。

「ダンゾウ、俺が見て来よつ。興味がある。」

「・・・珍しいな。貴様が興味をもつとはな。」

「たまにはな。」

「よからう。好きにせい。ただし、誰がきたのか教えるのだ。よい  
な？」

「・・・わかつた。」

サスケは瞬身でこの場から去った。

その頃、里の川が流れるとある道でカカシ、アスマ、夕日紅の上忍  
三人が里に不法侵入した二人と対決していた。

一人は千柿鬼鮫・・・鮫のような顔と巨体、そして手にもつ霧隠れ  
のみが持つといわれる大刀鮫肌を持つ“霧隠れの怪人”またの名を  
“尾無しの尾獣”とも言われる忍。

そしてもう一人は、サスケの兄イタチだつた。

二人はある組織に入り、ある目的の為に木の葉の里に潜入してきた  
のだ。

現状はカカシがイタチの幻術月読を食らい意識を失う寸前でアスマ  
と紅はカカシの指示で目を閉じている。

「ほう・・・あの術を食らつて精神崩壊を起こさぬとは・・・し  
かしイタチさん。その眼を使い過ぎるのはアナタにとつても危険。」

「問題無い。」

「ぐつ・・・探しもの・・・とはうちはサスケの事か。」

「いや・・・オレの探してるものは・・・」

「一.」

イタチと鬼鮫は背後にいる存在に気付きましたま振り向く。  
そこには鬼の面を被った暗部・・サスケが手すりの上に立っていた。  
ついに、サスケとイタチの兄弟対決が幕をあげる。

## 戻ってきた者（後書き）

サスケ対イタチ。

兄弟の再会は戦いに変わる。

次回、情報交換・・・

うちはイタチ

CV・・石川英郎

性格・・原作とほぼ同じ

容姿・・原作と同じ

備考・・うちはサスケの兄で暁のメンバーの一人。六年前のうちは滅亡事件の実行者。里の平和を第一に考え幼き頃に戦争を直に感じた為戦争や争いを嫌う。サスケはもちろんナルトとヒナタと仲がよい。実力は暁でもトップクラス。忍術は火遁。写輪眼の最高の使い手。

再会せし兄弟（前書き）

ついに再会したサスケとイタチ。  
それは、偶然か必然か・・・

イタチと鬼鮫は暗部のサスケを睨む。

「鬼の面……なるほど、アナタが鬼の暗部ですか。」

「・・・・・」

（鬼の暗部……何故ここに？）

（やはり兄貴か。忘れるところだつたな。原作の知識が重要なところ以外は薄れてるからな）

サスケはイタチをじつと見つめる。

「アナタが相手になるのですか？クツクツクツ……削りがいがありますねえ！」

鬼鮫は鮫肌をサスケに向けて構える。

サスケはクナイ二つを取り出し鬼鮫に向けて投げる。

二つのクナイを鬼鮫は鮫肌を盾にして防ぐ。

その間にサスケは鬼鮫の目の前に現れ刀を振るうが、それを横に跳び避ける。

「やりますねえ・・・顔面に向かつてクナイを投げ私が鮫肌で防ぐ  
ようにし視界を封じる。その間にアナタは懐に入り攻撃するですか。  
しかし、背後に周り攻撃すればよかつたのに何故ですか？」

「さつき背後をとらなかつたのは読まれると思つたからだろう。そ  
うでなくては正面から攻撃なんて事はしないはずだ。」

（さすがは兄貴だな。よく読んでる。背後をとれば下ろした鮫肌で  
防がれるのは予想済み。だから正面から攻撃したんだ。兄貴から離  
れさせるためにな）

鬼鮫の疑問をイタチが読み、サスケはそれを心中で肯定する。  
サスケはある事をする為にイタチと鬼鮫を離れさせたのだ。

「それにしてもその刀・・・なかなか業物ですね。私の鮫肌とどつ  
ちが強力ですかね！」

サスケと鬼鮫がともに駆ける。

二人の武器がぶつかり、周りに飛沫が上がり水で一人が見えなくな  
る。

水が落下した瞬間サスケは一人になり、本体はイタチに向かつて分  
身体は鬼鮫と鍔競り合いをしている。

「影分身か。」

「・・・」

本体といタチはクナイを構えぶつけ合つ。  
分身体と鬼鮫は一度距離を取り、鬼鮫は印を組む。  
サスケも素早く印を組む。

「水遁、水槍撃！！」

（水遁、水陣壁！）

水の槍がサスケを襲うが水の壁がそれを防ぐ。

（やるな。だが・・・甘い）

「！？むおおつ！」

鬼鮫は下からなにかくることに気付きバック転で躰す。  
水の中から現れたのは水の龍だった。

「水龍弾ですか。あの一瞬で術を発動するとはなかなかやりますね。」

（今のを躰すとはな。さすがは暁の一員か・・・筋縄ではいかない  
な）

その頃サスケとイタチはクナイ同士で結び互いの顔を近付ける。  
イタチは自身の田で面の中の田に気付く。

（あの田、まさか・・・）

その瞬間、二人は精神世界にきていた。  
サスケが月読を発動したのだ。

「・・・まさかお前が鬼の暗部だったとはな・・・サスケ。」

「・・・・久し振りだな、兄貴。」

サスケは面を外し、素顔を晒す。

二人は久し振りの兄弟の再会に笑みを浮かべる。

「お前が来るなんてな。今、お前達はどうしてるんだ?」

「・・・兄貴が里を去ったあと、俺とナルトとヒナタはダンゾウの所属の暗部になつた。そしてナルトとヒナタは表では死んだ事になつた。」

「なるほど、六年前のナルトとヒナタが突然死んだという情報を聞いた時は驚いたがそういう事か。納得した。」

「・・兄貴はあれからどうしてるんだ?」

「俺はあのあと暁という小組織に入った。この組織にはS級犯罪者が俺の他に九人ほどいる。」

サスケとイタチは互いに情報交換をし、特に今までなにをしていたのかを話し合つ。

「なるほど・・・それで兄貴、ここにきたのはいったい何の用でだ?なんか任務があつてきたんだろう?」

「ああ・・・実は、ナルトを探していてな。」

「ナルトを?・・・九尾か。」

「鋭いな。その通りだ。ナルトを暁に連れて行く事なんだが、俺自

身は別に連れて行く気はないし友をさらつゝ気はない。」

イタチは暁に属するにあるまじき事を喋る。

イタチにとつて暁はどうでもよく、サスケ達が無事だと知ればもう指令は達つせられたのだ。

「ナルトはヒナタと一緒に里から離れた森の一軒家にいる。そこにはいるはずだ。」

「・・・よいのか？」

「構わんさ。実際に会つてれば報告を誤魔化すのも容易いだろ？？」

「確かに。すまないな、不甲斐ない兄で。」

「いや、俺にとつては最高の兄貴だ。」

二人は笑う。

「また会おうサスケ。」

「ああ。次に会う時は敵同士かもしれないけど、俺は兄貴と戦わない。それだけだ。」

「俺もお前やナルト、ヒナタとは戦わない。約束する。」

その瞬間、精神空間は碎けた。

二人は精神世界から抜けた瞬間互いに距離を取る。

ちなみに月読は例え精神世界では何時間、何日だろ？と現実ではほんの一瞬に過ぎない。

「人の会話は一人にしかわからない。  
サスケとイタチは見つめあう。

「イタチイイ……」

イタチの後方から突然叫び声が聞こえてきた。  
イタチは背後を振り向くと、そこにコラムが殺氣を出しながらイタチを睨み付けていた。

「ようやく会えたぞうちはイタチ！やつと…やつと貴様を殺せる  
！俺は、貴様を殺す為に生きてきた！」

コラムは左手に千鳥を発動しながら水の上に立つ。

（まだ水の上に立つ技術を身につけてないはずなんだがな。なるほど[写輪眼でか。不完全だがこれくらいはコピーできるか]

サスケはなんも感慨も感じずにコラムを見る。

「ほお、[写輪眼ですか。うちは一族はアナタ自身とアナタの弟以外は全滅したと聞きましたが。誰ですか？」

「…・だれだ？貴様は。」

「な！？なん、だと…・・」

イタチはコラムが誰なのか分からなかつた。  
かなりマジである。

「貴様ああ、俺をしらんだと…・・ふざけてんのか…」

「いや、全く知らないんだがな。貴様がうちは一族だといふことはわかるのだがな。」

イタチにとつてうちは一族はもはや過去のものであり、あの事件の細かいところまではいちいち覚えてはいない。

「ふざけるなあ・・・ふざけるなあ!!」

コラムは完全に頭に血が上り怒りが爆発した。  
コラムの頭の中はイタチを殺す事だけしかない。

「俺はイタチ、貴様を殺すために今まで生き抜いてきた! その貴様が俺の事をしらんだと! ? 許さん・・・貴様は・・・うちはイタチ、貴様は殺す!! うおおおお!!」

コラムはイタチに突っ込み千鳥をくらわそうとする。

「・・・」

「な!・・・なん・・だと! ?」

が、イタチはあっせりコラムの左手を掴み千鳥を躰す。  
そこからイタチの一方的な攻撃が開始された。

腹に拳を叩き込み肘打ちで頭を叩き下ろし膝蹴りで顎を蹴り上げ掌底で顔面を抉り、連続攻撃が決まる。

コラムは何もできぬままなすがままに食らこまく悲鳴をあげる。

「コラム!」

アスマと紅はすぐにでも援護に向かいたいが目を瞑つたままで何もできない。

カカシは月読を食らい意識が朦朧としているので今にも氣を失いそうだ。

サスケは助ける気がないため見てるだけ。

イタチはユラムの首を右手で掴み持ち上げる。

すでにユラムはボロボロ状態だ。

イタチは追い討ちに月読を掛ける。

「ぐああああああああ・・・・・・」

ユラムの甲高い悲鳴が木靈する。

「イタチさん。 そう何度も使わないほうがいいですよ。」

鬼鮫はイタチの心配をする。

鬼鮫はイタチの心配をしながらも分身体のサスケと剣劇をしている。

（分身体とはいこの暗部は強いですね。このままだとキツいですね。ならば、ここは何もできない彼等を狙いますか！）

鬼鮫はカカシ達をチラリと見て、彼等を利用使用と考える。

「オラアツー！」

「ー。」

（なんてバカ力だ。はじきとばされた。）

分身体は刀で防御したが少しどばされる。

その間に鬼鮫はカカシ達を狙いつけ走る。

「悪いですが、先にアナタ方から片付けをせてもうりますー。」

「 」

鬼鮫は力カシ達に鮫肌を振るおつとする。

「木の葉剛力旋風！！」

「 」

（なつ、何イ！）

何者かが、鬼鮫を蹴り飛ばした。  
分身体の横を通りすぎる。

イタチと本体のサスケも気付き振り返る。

「何者です？」

「木の葉の気高き鷹い猛獸・・・マイト・ガイ！」

「・・・・なんて恰好だ。珍獸の間違いでは？」

「あの人を甘く見るな。」

いつの間にかイタチが鬼鮫の隣りに立つ。  
グラムは手から離れて川に沈んでいく。

（やはりイタチ・・・）

「ぐつ・・・・・」

限界だつたのか、カカシは氣を失い倒れ沈みはじめる。ガイは急いでカカシを助け肩に担ぐ。

「カカシ！」

（カカシをここまで・・・）

「イタチと目を合わせるなガイ！―術にかけられるぞ！―！」

アスマがガイに忠告する。

「そんなものはこつちとて分つてゐ！カカシとの対戦対策に写輪眼に対する戦い方も考慮してゐ。一人とも目を開けろ！―」

突然の目を開けていい宣言を聞き、アスマと紅は戸惑う。

「写輪眼と闘つ場合は目と目を合わせなければ問題ない！常に相手の足だけを見て、動きを洞察し対処するんだ。」

「確かにそう言わればそうかも知れないけど・・・」

「そんな事が出来んのはア、お前だけだぞ。」

そう言いながら一人は目を開ける。

「まあな。足だけで相手の動き全て把握するにはコツがいる。だがこの急場にそんな事も言つてられん。ともかく今すぐに慣れろ！―」

イタチと鬼鮫はジッとしながら三人とサスケと分身体を見る。三人も会話しながらも油断なくイタチと鬼鮫の足元を見る。

「どうする？」

「紅！お前はカカシを医療班の所へ！アスマはオレの援護だ。」

ガイは紅にカカシを預ける。

「後はオレが手配した暗部の増援部隊が来るまで、少しの間相手してやる！そっちの暗部もいいな？」

「・・・」

サスケはうなずき、クナイを逆手に持ち替えて構える。

「いい度胸ですねエ.....」

「鬼鮫、止めだ。」

誰もが今にも飛び出しそうな雰囲気なのにイタチが突然の止め宣言を言つ。

「オレ達は戦争をしに来たんじゃない。残念だがこれ以上はナンセンスだ。帰るぞ。」

「.....せつかく...ウズいてきたのに仕方ないですエ。」

「・・・」

イタチと鬼鮫はこの場から立ち去つた。  
とりあえず現状は助かったのだ。

「助かつた…のか？」

「そのようね。」

「ふう…おつと…そういえばユラムの事を忘れていた…ユラム…」

ガイ達はユラムが沈んだであろう場所を見る。

見ると、サスケが一つの間にかユラムを引き上げていた。

サスケはユラムをガイに投げ渡す。

「おつと…」

ガイはしつかりキャッチしておんぶする。

その間に分身体は刀をサスケに投げ渡し、分身体は消える。

サスケは刀をしつかり掴み鞘に戻す。

そのままサスケは立ち去ろうとする。

「待て！お前は鬼の暗部だな？もしよかつたらオレ達と一緒に…！」

ガイが行こうと言おうとした瞬間、サスケが三人を睨みつける。サスケの睨みに三人は身を固くする。

しばらく睨み付けたあと、サスケはこの場を去った。

残った三人が動いたのはサスケが去って一分後だった。



再会せし兄弟（後書き）

サスケは去り、ナルト達のいる場所へ。  
イタチと鬼鮫もナルトのいる場所へ。  
次回、一時の再会・・・

久し振りに四人が集う。  
一人才マケがいるが・・・

イタチと鬼鮫はサスケに言われた森の方に移動していた。

「しかし、本当にこの先にいるんですかね？」

「いるのは間違いない。 いつてみればわかる事だ。」

鬼鮫は疑問に思いながらもイタチの言つ事を信じて森を駆ける。

その頃、サスケは暗部服を脱ぎ面を外しつもの姿に戻りイタチ達の後を追つ。

「 あの程度の睨みに動けなくなるなど、上忍のくせにふぬけ過ぎだ。

サスケはガイ達のふぬけっぷりにあきれ果てていた。

「まあどうでもいいか。今は兄貴の後を追わないとな。 兄貴はともかくあの鮫顔は必ず仕掛けるだろうな。」

サスケは速度を上げて森を駆け出した。

イタチと鬼鮫はナルトを見つける。

「いた。」

「アレですか。生きていたのですね。しかも彼女ご同伴とはやりますね。」

ナルトはヒナタと一緒に暗部用の一軒家の近くで鍛練をしていた。

「あれは日向ヒナタ。やはり生きていたか。」

「日向ヒナタといえば六年前に死んだはずではなかつたのですか?」

「……それは本人の口から聞いたほうがいいだろう。いくぞ。」

「はい。」

ナルトとヒナタは体術の応酬を繰り広げていた。

たまに鍛練をしとかないと急げてしまつため休みの日は一時間だけでもしつくのだ。

「……どうした?」

「誰かに見られてる。」

「…誰なんだ？」

「気配は一つ。」

ヒナタは白眼で一人の存在に気付いた。

ナルトとヒナタは気配がする方向に向き構える。

「出で」、「そこにはわかつてんだよー」

「出で」、「ないのなら」、「からいきますよー」

ナルトとヒナタが出てくるよう促すと、イタチと鬼鮫が木の枝から飛び降り二人の前に現れる。

「気付いてましたか。さすがは日向一族、厄介ですね。それに強い・・・わざまで戦つてた上忍より強いですね。」

「久し振りだな。ナルト、ヒナタ。」

「お久し振りですイタチさん。」

「まさかイタチだったとはな。まさか」、「じて会うなんてな。そつちの鮫顔は誰なんだ？」

「おや？イタチさん、九尾のと日向一族の娘さんとお知り合いだったのですか？それにしても、鮫顔とは酷いですね。これでも結構気にしているのですよ。」

鬼鮫はイタチがナルトとヒナタと知り合いでいる事に驚く。ナルトに言われた事を以外に気にしてるようだ。

鬼鮫は自分が色ものだとわかっているため少し落ち込む。

ちょうどその時、イタチと鬼鮫の背後に気配を感じ振り向く。

「・・・久し振りだな兄貴。」

「久し振りだな。」

「これはこれは・・・今日はよくうちは一族に会いますね。もしかして、彼は。」

「・・・俺の弟だ。」

追いついたサスケがイタチと鬼鮫の背後に立つた。

「帰つてきた・・・わけではないよな。なにしにきたんだ?」

「・・・ナルトを連れてくるよう命令された。」

「イタチさん。よろしいのですか?喋つて。」

「構わんさ。誤魔化すのは無理だろ?。それに知つたとしても三人はなにもしないだろ?。」

「ああ。どんな組織に入つたんだ?」

「暁だ。」

「あかつきイ?」

「聞いた事ない組織名ですね。」

ナルトとヒナタは聞いた事ない組織名に気になつた。

「俺を含む九人に属する小組織だ。俺達は尾獸を捕らえる事に指令をもらい、ナルトを捕らえにきた。」

「ふうん。で、やるのか?」

「ナルト君は渡しません。もし、力づくだといつなら・・容赦しません!」

「・・・どうしますか?一戦やりますか?」

ナルトとヒナタと鬼鮫はすでに臨戦体制をとる。サスケとイタチは互いを見つめ合い思案する。

「・・止めだ。オレ達二人では三人に勝つのは難しい。それに生きていたというだけでも儲け物だ。十分だ。」

「・・・そうですね。まだ連れていく必要は無いですね。」

「・・・懸命な判断に感謝する。」

鬼鮫は鮫肌を納め、ナルトとヒナタも構えを解く。

「それじゃあ、帰る前に兄貴の眼の治療をしようか。」

「いいのか?敵に塙を送るようなまねをして。」

「構わんさ。兄貴には健康であつてほしいからな。」

イタチはサスケの厚意を受ける事にした。

イタチは屈み、ヒナタが医療忍術で眼を治す。

「これでいいですか？」

「ああ。ありがとうございます。」

治療を終え、イタチと鬼鮫は里から去ろうとする。

「じゃあな兄貴。」

「ああ。次に会う時は敵同士だ。」

「そこ」の鮫顔はともかく、イタチとはやり合いたくないぜ。」

「私もです。」

「・・・オレもだ。お前達と戦わない事を祈る。」

そう言い、イタチと鬼鮫は去つた。

「行つちまつたか。」

「・・・ナルト君。買い物に行こい?」

「そうだな。」

ナルトとヒナタは買い物に出掛けていった。

サスケは一人黄昏のように空を見上げた。

それから一週間と三、四日後、トモルと自来也は綱手と付き人シズ  
ネを連れて帰ってきた。

そして、綱手は五代目火影になった。

邂逅（後書き）

綱手が火影になり、また忙しい任務。  
そんな中暗部サスケに出された任務は・・・  
次回、探す者・・・

探す者と繋がる者（前書き）

綱手が五代目火影になった。

サスケ達はいつもの任務に励むが . . .

## 探す者と警告する者

綱手が火影になり、サスケ達は任務に取り急いでいた。

里の復興のため、やる任務は多く不眠不休が続く。

下忍の任務もやるためさすがに疲れはくる。

しかし、下忍の任務は素早く終わらせるため、昼は寝て休息を取っている。

そんなある日の夜、サスケは一人ダンゾウに呼ばれて根の最深部に移動する。

なお、ナルトとヒナタは一人一組の任務に遂行中。

「なんだダンゾウ？これから任務なんだ。さつと終わらせて帰りたいんだ。」

「実は、綱手の奴がお前達の事を調べようとしてるんだ。」

「あん？俺達を？」

サスケの愚痴をスルーし、綱手がサスケ達を調べていると教える。

「綱手はお前達が何者か知らんからな。何人かがお前達の正体を探つているようだ。」

「しかしなんでだ？」

「お前達の任務達成率と資料の少なさで気になつたんだろう。それで調べてるんだろ。」

「そんなんで調べるつて職権乱用じゃないのか？」

「さあな。とにかく気をつける。お前達の事がバレると面倒事が起るからな。」

「わかつてゐる。今日は一人で任務を行うから問題無いだろ。心配は無用だ。」

ダンゾウは忠告し、サスケは了承し去つた。  
任務を受けに。

「・・・と思つていた俺だ。」

サスケは一人ごとをいいながら任務に入つた。  
ただし、一人追加されたが。

綱手から暗部の任務が入り「行こうとしたら何故か力カシジが一緒にする事になつてしまつた。

サスケは断つたが許可はもらえず仕方なく力カシジと任務をすることになつた。

今のサスケは機嫌が悪かつた。

「鬼の暗部だね。俺は畠力カシ。」

「・・・黒鬼だ。」

サスケは声を変えて名を教える。（声は立木文彦）

「へえ、結構渋い声なんだね。」

カカシが話しかけてくるが、サスケは無視する。

「あの時は助けてくれてありがとうね。アスマから聞いたよ。無様な姿を見せちゃったね。」

「どうでもいいが、そろそろ任務を始めるぞ。」

カカシはお礼をしようとするが、サスケは無視しきりと任務を始めようと急かす。

「今回の任務は里に潜入してくるであろう忍を始末することだ。行くぞ。」

サスケは任務内容を言い、さつさと移動を開始した。  
カカシはそんなサスケの後を追う。

（クツ・・・なんてスピードだ！追いつかない！）

カカシはサスケの移動速度に追いつかない。  
何とか追いつこうと本気を出して移動する。  
サスケは汗一つかかず移動し・・・止まる。  
カカシもサスケの隣りに立ち止まる。  
カカシの額には汗が浮かぶ。

「匕首に近付いてくるな。数は……三、四十人位か。」

「はあ……はあ……どうするんだ?」

「匕首から仕掛ける。」

サスケはクナイを八本取り出し構える。  
もちろん起爆札付き。

「派手なのはあんまり好きじゃないが……今回は特別だ!」

サスケはおもいっきりクナイを投げる。  
八本のクナイはかなりのスピードで飛んでいき、敵の忍の額や心臓、  
腹などに突き刺さる。

「な、なんだ!?」

「喝!」

クナイは爆発し、爆発した部分が弾け中身が飛び散る。  
まずは八人が死んだ。

それを確認したサスケは刀を取り出し握る。

「さて、敵さんどもは混乱しているはず。さつさと片付けるか。貴様は取りのがしたおこぼれでも始末しとくんだな。」

ぼーぜんとしているカカシにそう言い、サスケは敵の目前に跳ぶ。  
まず近くにいる一人の忍に近付き、鞘から刀を抜き切り裂く。  
そのまま、次の敵に迫りまた斬る。

カカシはサスケのあまりにも速く圧倒的な強さに軽く恐怖した。

（くつ！・・・なんて強さだ！刀だけで数人の忍をあっさり殺すなんて！しかも、もうまた一人一人敵を！）

そんな考えをしてる間に一人の忍がカカシに迫る。

額宛は雨隠れのマーク。

カカシはクナイを逆手に持ち鍔競り合いをする。  
腐つても里一番の技師・・・雨隠れの忍を殺す。

（この雨隠れの忍、上忍か！くそつ！たつた一人にこの苦戦とは、  
本氣で鈍つてるな！）

カカシは自身の身体の鈍りに叱咤しながらも一人目と戦う。

その頃サスケはカカシの倍以上の相手をしていた。  
しかし、サスケはそれらをほぼ一撃で仕留める。

（見た所、上忍が十三、特別上忍が十、中忍が七か。となるとクナイで死んだ奴等も加えると三十八か。かなりの数だな。だが、大した事は無いな。二、三人はカカシに殺らせるか。）

サスケはそんな事を考えながら敵を殺していく。

サスケは逃げようとする敵も逃さず容赦なく斬り殺す。  
約一分後、敵は全滅した。

サスケはカカシの隣りに降り立つ。

カカシは汗をびっしりかきながらはあつはあつと息を吐く。カカシはなんとか三人の忍を倒したのだ。

「任務は完了だな。帰還するぞ。」

「待て……！」

サスケは火影に報告しに帰還しようとするが、カカシがそれを止める。

「……なんだ？」

「俺は君と初めて組んだのだが……はつきり言おう。君は危険だ。悪いが……君を計らせてもらひつい！」

カカシはそう言いながら、左手に千鳥・・いや、雷切を発動する。サスケは後ろを向きながらカカシの話を聞く。

「貴様」ときでは俺をどうにもできません。」

「やつてみなくてはわからん！」

「わかるぞ。千鳥程度で俺を知りうるといろがな。せめて……」

「

そう言いながらサスケは振り向きもま左手から何かを放つ。それはカカシの頬を掠め、木に刺さる。

カカシはゆっくり後ろを向くと、木になにかが刺さっていた。

「……このへりこはしてもらわないとな。」

「これは・・・形態変化か?」

(バカな・・・雷切から形態変化をするだとー?)

刺さつてたものは千鳥を形態変化させた千鳥千本。  
サスケは振り向きざまに放つたのだ。

「そういうえば、貴様は俺や金孤と銀姫を調べるようだな。五代目にも言うが俺達を調べるな。これは警告だ。もしこれ以上調べようとする貴様を殺す。」

サスケは力カシを睨み付け忠告する。

力カシは仮面越しの睨みに竦む。

サスケはしばらぐ睨んだ後、里に帰還し五代目に任務完了の報告する。

もちろん、忠告も忘れずに。

力カシは忠告して帰つた頃に帰還した。

そして次の日、五代目達はサスケ達を調べるのをやめた。  
さらにもう一つ、コラムが里から去つた。

グラムが里から抜けた。

しかし、サスケ達には関係ない。

次回、第一部完・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2743x/>

---

闇夜の友愛

2011年12月17日23時17分発行